

宮内庁書陵部所蔵九条家旧蔵本

『諸道勘文 神鏡』第一巻の紹介と基礎的考察

神 戸 航 介
杉 田 建 斗

序

本稿は宮内庁書陵部所蔵九条家旧蔵本『諸道勘文 神鏡』（函架番号九・53、以下『諸道勘文』と表記する）の翻刻と、内容についての基礎的考察を行なうものである。『諸道勘文』は内侍所神鏡に関する先例を整理したものであり、摂関・院政期の史料を豊富に含んでいる。当該史料は現在、宮内庁書陵部の所蔵資料目録・画像公開システムで鮮明なカラー写真を容易に閲覧することができ、第二・三巻は最近高田義人・白井和樹両氏によって翻刻が発表されたが、第一巻の翻刻はされていない。

本書の主題である神鏡は、皇位を象徴するレガリア（いわゆる三種の神器）の一つであり、平安時代には温明殿の内侍所（「賢所」と呼ばれる）に安置され、女官によって守護されていた。神鏡については近年斎木涼子氏が優れた研究成果を公表しており、神鏡は当初他の宝

器に比べ宮廷社会における認知度は低かったが、十一世紀に神格化し天照大神との同一視が進み、その結果天皇が新たな理念的権威を獲得するに至ったと述べている。⁽²⁾ 斎木氏の史料整理は行き届いており本稿でも多くを拠っているが、『諸道勘文』の記述には全く触れられていない。第一巻について言及した研究は管見の限り姚昌昌氏の論考が唯一のものであるが、残念ながら本書所収の『唐曆』逸文の紹介に終始し、書誌的検討も含め本史料の意義を十分にとらえられていないと言えない。そこで本稿では、『諸道勘文』のうち第一巻について、全文を翻刻するとともに、本書の記述について基礎的考察を行なうこととした。

本文は序・第一章・第三章・結語を神戸が、第二章・第四章を杉田が分担し、翻刻は杉田が作成した原案に神戸が修正を加え、全体を調整した。

一 「諸道勘文」の書誌

本書の書誌の詳細は高田・白井両氏の論文に譲り、ここではごく簡単に触れておきたい。『諸道勘文』は現状卷子本三巻から構成され、そのうち第一巻は全三十四紙からなる。奥書はないが、第二・三巻の紙背文書から康永元年（一三四二）以降の書写と推定される。本書は九条家旧蔵本として伝来したものであるが、近世初期の九条家当主道房が作成した蔵書目録『九条家記録文書目録』（宮内庁書陵部所蔵、函号九・271）⁴によると、第二十箱の中に、

一卷 内侍所神鏡焼損可奉鑄改否事諸道勘文并諸卿申詞

二巻 不待神鏡劍璽等先可有踐祚事諸道勘文并諸卿申詞

とあり、これが現在の宮内庁書陵部所蔵『諸道勘文』に対応し、前者が第一巻、後者が第二・三巻に相当する。現状では一括とされている三巻であるが、近世初頭までは第一巻と第二・三巻は別個の史料として認識されていたようである。

ところで、本書の性格に関連して『本朝書籍目録』には、

諸道勘文 二百巻（朝家有重事時、仰諸道博士、被召勘文。或曰、仗儀類集成三数巻。中原師安撰。）

とあり、重大事案に関する公卿の判断にあたつて諸道博士に命じて作成させる勘文を類集した「諸道勘文」なる本二〇〇巻が作成されたことが知られる。この「諸道勘文」は現存しないが、和田英松氏は『通憲入道蔵書目録』に見える「類聚諸道勘文」がこれにあたるとし、また『群書類従』に「諸道勘文」として収載されている二巻の存在を指摘する。これらを参考に姚昌昌氏は、『諸道勘文』はこの「諸道勘

文」二〇〇巻を構成する三巻であるとした。しかし「諸道勘文」の語は必ずしも固有名詞ではないし、本書第一紙に残る外題「諸道勘文神鏡」は、江戸時代初期の九条道房による修補の際に付けられたものであるから、姚氏の比定には従えない（高田・白井論文も同様の指摘をしている）。むしろ同じ『本朝書籍目録』神事に、「初天地本記（見「神鏡勘文」）とある箇所が注目される。『初天地本記』なる書は『諸道勘文』第三巻に引用されており、これに対応するとすれば、『本朝書籍目録』が成立したとされる鎌倉時代後期には本書は「神鏡勘文」と呼ばれていたことがわかるのである。

さて、第一巻の記載を内容別に整理すると、以下の十八種の文書から構成されている（高田・白井論文と一部異なる）。

《1》天徳四年式部少録奏敦光奏状

《2》内侍所根元事（『江記』逸文）

《3》寛弘三年六月十三日大江匡衡勘文（紀伝勘文）

《4》寛弘三年六月十五日大江以言・藤原弘道勘文（紀伝勘文）

《5》寛弘二年十一月□九日清原広澄勘文（明経勘文）

《6》寛弘三年正月二十二日海善澄勘文（明経勘文）

《7》寛弘二年十二月二十日令宗允亮勘文（明法勘文）

《8》寛弘二年十二月二十六日美麻部直本・令宗允正勘文（明法勘文）

勘文）

《9》寛弘三年三月十一日賀茂光榮勘文（陰陽勘文）

《10》寛弘三年四月 日秦政国勘文（陰陽勘文）

《11》寛弘三年 月 日惟宗文高・安倍吉平勘文（陰陽勘文）

《12》寛弘三年七月三日御前定定文

《13》寛弘二年十二月十日宸筆告文

《14》寛弘二年十二月十日告文

《15》永暦元年二月十三日中原師元勘文（外記勘文）

《16》永暦元年四月十一日二条天皇綸旨

《17》永暦元年四月十二日二条天皇綸旨

《18》永暦元年四月十三日徳大寺公能請文

《2》のみ異質であるが、《1》は天徳四年、《3》《14》は寛弘二年の内裏焼亡に伴う神鏡罹災とその対応に関する文書群、《15》《18》は平治の乱で破損した神鏡辛櫃の新造に関する文書群である。これらの文書群がいかなる契機のもとに一書にまとめられたかは未詳とせざるを得ないのだが、天徳・寛弘・長久の神鏡罹災に関する従来知られていなかった史料を多く含み、それにより新たな事実を確認することができる点で極めて重要な史料である。次章以下でそれぞれの具体的な内容を概観していこう。

二 天徳四年の神鏡罹災

1 神鏡の焼損

天徳四年（九六〇）九月二十三日、内裏火災が発生し宮中温明殿は焼亡した。この天徳四年の内裏火災は神鏡の神聖化の契機として知られているが、焼損した神鏡の動向は意外と不明な点が多い。しかし《15》の外記勘文にはこの火災に関する新出の外記日記と『村上天皇御記』が豊富に含まれており、神鏡と大刀契の動向をより詳細に知ることができるようになった。既知の史料と合わせ天徳四年の動向を検討したい。

まず《15》には天徳四年九月二十三日、二十四日の記事に続けて「十月三日己巳、今日縫殿大允藤原文紀参向申云、去九月廿四日依宣旨、御坐於内裏加志胡所三所、令遷幸於縫殿寮者。其間日記如此」とし、以下、九月二十三日から十二月五日までの詳細を書き留めている。『釈日本紀』巻七・述義三・神代上の八咫鏡の項に「外記云田、威所立所。一所鏡。件御鏡雖有猛火上、而不涌損。即云伊世御神。」一所魚形。《無破損。長六寸許。》一所鏡。《已涌乱破損。紀伊国御神云々。》と外記日記を典拠とすると考えられる記述がみえ、これが《15》の「其間日記如此」以下が引く九月二十三（四）日の記述と同じ文章であるため、《15》は特に明記が無い場合外記日記を典拠としているとわかる。神鏡を含む威所三所は火災後に縫殿寮に保管されたが、「其間日記如此」以下の記述は（少なくとも十月三日までの部分は）縫殿寮の大允が外記局に参向して火災当時の経緯を報告したものに基づくものである。なお『日本紀略』天徳四年九月二十三日・二十四日条、十月三日条には《15》の冒頭の九月二十三日、二十四日、「其間日記如此」以下を引く十月三日の記事と同様の文章が記されており、『日本紀略』が外記日記を典拠としていることが窺える。《15》所引の外記日記によると、火災直後に回収された威所三所は無傷の伊勢鏡・魚形、焼損した紀伊鏡の三つから成ったという。新訂増補国史大系本『日本紀略』ではこの内魚形を「真形」と翻字するが、『釈日本紀』の記述、及び「長六寸許」とする《15》・『日本紀略』の記述から「魚形」が適当であると判断され、これはおそらく鏡ではなかった。⁽⁸⁾ また寛弘二年（一〇〇五）の内裏火災直後の『小右記』寛弘二年十一月十七日条には次のようにみえる。

神鏡太刀并契尽焼亡。鏡僅有帶、自余焼損無_レ円規、失_二鏡形_一。

又有^(符)「大刀刃」。但契魚符等少々在矣云々。村上御記云、天徳四年九月廿四日^(三)焼亡云々。廿四日、重光朝臣申云、罷^(大正)到温明殿、所^(三)求見、瓦上在^(三)鏡一面。其鏡径八許寸、頭雖^(三)有^(三)一瑕、專無^(三)損。円規并帶等甚以分明露出、縁^(符)破瓦之上。見^(三)之者無^(三)不^(三)驚感^(三)。又求^(三)得^(三)大刀刃等云々。又以所^(次カ)求得^(金カ)大銅魚形二隻、(女官等或傳、是亦神也。然而未^(三)知^(三)真偽^(三))大刀四柄、(室握并焼失。只遺^(三)種々小調度^(三))金銀銅魚荷契合冊九隻^(符)(或銘發兵・解兵荷其国。或銘 其官。契皆作^(三)魚形、相合如^(三)木契之趣。又有^(三)片々不^(三)合者^(三))又有^(三)鍾占合不^(三)離者^(三)。此焼損之所^(三)致^(三)云々。廿五日、清遠・伊陟等令^(レ)申。又求^(三)得^(三)焼鏡一面。銅魚契卅余枚、合前惣七十四枚。雜劍冊柄(之中可^(三)有^(三)節刀。又加^(三)金銀銅等小調度^(三))云々。故殿御日記云、恐所雖^(三)在^(三)火灰燼之中、曾不^(三)焼損^(三)云々。鏡三面中^(三)伊勢太神・紀伊国日前・国懸云々。如^(三)件説^(三)似^(三)三面^(三)。

ここで引用される『清慎公記』は鏡の枚数を三面(伊勢鏡一面・紀伊鏡二面)とみなす。一方、『村上天皇御記』は女官の説として「大銅魚形二隻」の存在を指摘し、伊勢鏡と紀伊鏡、計二面の発見を記している。さらに『15』(第二卷『3』)の外記日記(『日本紀略』も同様)では九月二十四日条に「鏡三」とあるのに対し、藤原文紀の報告を受けて記した十月三日条では「加志胡所三所」「威所三所」とし、これを伊勢鏡一面・紀伊鏡一面・魚形(実態は『小右記』所引『御記』にみえる二隻か)と記している。従来、鏡の枚数が史料間で異なることについて、例えば大石良材氏は結論を出すことを避け、斎木涼子氏は左大臣藤原実頼(『清慎公記』)の理解を妥当なものとしなしてきたが、鏡を三面とする史料は『清慎公記』、外記日記・『日本紀略』九月二十四日条、そして『大倭本記』の三つに過ぎない。

この内『大倭本記』は『諸道勘文』第一(三卷に多数の引用が確認できる古書で、『本朝書籍目録』神事に「大和本記 二卷。〔記〕神代古事。上宮太子御撰。」とみえるものに相当する。和田英松氏は聖徳太子に仮託してつくられた可能性を指摘し、「釋日本紀に引きたる日本紀の私記にのせたるに據れば、平安朝中期以前になりしものなる事は明なり」と述べている。成立時期に關して言えば、承平六年(九三六)〜天慶六年(九四三)に行なわれた日本書紀講書の時のものとされる『日本書紀私記(丁本)』に計五か所言及されていることから、その成立は天慶六年以前と考えられ、更に『日本書紀私記(丁本)』に、

譬猶^(三)「浮膏」而漂蕩。

問。此書已引^(三)古事記也。然則漂蕩之文^(三)久良介奈須太々^(三)与倍利と可^(レ)読也。而只多々倍利と被^(レ)読。其由如何。

師説。古事記・上宮記・大和本紀等、皆久良介奈須太々^(三)与倍利と云々。然則其説為^(レ)先。太々^(三)与倍利^(三)云々可^(レ)為^(レ)後説^(三)。

參議淑光朝臣問云、或旧説、此漂蕩二字^(三)久良介奈須和太々^(三)介利と読。於^(レ)今言^(三)之、頗似^(三)有^(レ)便^(三)。

とみえる。丁本は講書における問答を記したもので、かつ史料中の參議紀淑光は天慶二年九月十一日に死去するので(『公卿補任』同年条)、『大倭本記』の成立は天慶二年九月以前と判明する。

参考までに逸文を相互に参照・校訂することで原文に相当するものを復原したものを掲げておく。⁽¹³⁾

天照大神欲招出奉。而以諸神祇等共論謀之、喚天子屋命・天太玉命・天額戸主命(此鏡造之遠祖。子石凝戸耳命三神等負須奉。時石凝戸耳命、(此曰大神之孫也。此神取天安河之河上白石、而

取天香山埴作^{〔天〕}天毗、閉為白銅湯涌成吹作鑄真大鏡。〔此鏡小不合成之。所居城国名草社宮日前国懸大神、称号^{〔天本〕}拜祭大神也。〕復更吹成湯涌祈鑄真大鏡。〔此鏡美好成合。是所居伊世国磯宮天照大神靈魂、天照大神崇敬拜祭大神也。〕

一書曰、天照大神以命天御孫命名天津彦々火丹々杵尊、而欲令知於葦原中国事。依指奉八咫鏡三面・玉鈴取持神禱曰、吾皇御孫命、以此物奉得、而天降以安平国閑食^{〔奉〕}。奉二鏡者吾御魂靈為大神。之一鏡与之玉鈴二物、吾御孫命朝夕御食之食向治祭神、而幸安国所知之。自御勝間入治藏定、天降来奉。一云、須沙濃命以為繼世子名正哉吾勝狭勝々速日天押穗耳命御子天津彦々火丹々杵命、以此神御子欲天降奉之。是時、神御祖命授天御孫命奉物麻二耳、八咫鏡三面・子鈴一合四物。以天御孫命天降奉之。又云、初天降来神天王名天津彦々火丹々杵尊之所持、而天降来天係大神及国係大神之御靈。此二大神、所坐於日向之襲高千穗宮奉。〔一云、笠狭御碕嚴敬祭也。〕同宮殿内齋嚴敬拜祭也。〔此二大神靈宝鏡之故、天係大神者天照大神之靈也。伊勢磯宮所坐崇敬拜祭也。国係大神者天照大神之前靈也。紀伊名草宮所坐崇敬拜祭也。〕

一書曰、天皇之始、天降来之時、共副護齋鏡三面・子鈴一合也。

〔一鏡者天照大神之御靈、名天懸大神。今伊勢国磯宮崇敬拜祭大神也。一鏡者天照大神之前御靈、名国懸大神。今紀伊国名草宮崇敬拜祭大神也。一鏡及子鈴者天皇御食津神、朝夕御食之食向夜護日護齋奉大神。今卷向穴師社宮所坐^{〔神宮〕}拜祭大神也。〕

本史料の一書二つは鏡を三面とする神話を伝え、後者の一書はそれを伊勢鏡、紀伊鏡、そして卷向穴師宮の御食津神に比定する。おそらくこの御食津神に比定された鏡が魚形にあたる（実態は鏡ではない）

ので、『大和本記』の成立する天慶年間より前に温明殿に鏡二面と魚形が安置され、それが鏡三面と誤解されるような状況が存在したと推定される。

外日記記（・『日本紀略』）は鏡を保管し実態を知っていたと考えられる藤原文紀の報告では「加志胡所三所」としており、おそらくこれが実態に即した当時の温明殿の状況であった。従って神鏡三面説を展開する『清慎公記』の見解は誤解と考えられる。このことは当時の貴族の神鏡理解の低さを如実に示すものであろう。

さて天徳四年九月の火災で神鏡は焼損したが、『15』によると十月十八日に新造の神鏡辛櫃二合に奉納された。その作法は一合に伊勢鏡、もう一合に紀伊鏡・魚形を奉納するもので、『本朝世紀』天慶元年（九三八）七月十三日条の内侍所移転記事にみえる「齋辛櫃二合」はこれと同様であったと考えられる。つまり天徳の火災後に神鏡は火災以前の賢所三所という外見を復活させたのである。これに関して興味深いのは前掲『小右記』所引の『村上天皇御記』に「大銅魚形二隻、〔女官等或備、是亦神也。然而未知真偽。〕とあることで、天皇は魚形についてよく知らなかったにもかかわらず、その魚形と合わせて神鏡が安置されているのである。これは十一世紀以降の神鏡ⅡアマテラスⅡ伊勢鏡一面Ⅱ辛櫃一合という状況と比較すると異質で、まだ神鏡の神聖化が充分に進んでおらず、神鏡を管理する内侍所女官の意見が尊重されていたことが窺える。なおこの魚形は後述する大刀契の内魚契に相当するものが後次的に伊勢鏡・紀伊鏡とともに祀られた可能性を指摘しておく。

また『15』所引『宇多天皇御記』には「天徳四年十月一日、令延光朝臣左大臣、奏^{〔御覽〕}式部少録奏敦光申坐^{〔御覽〕}内侍所大神本縁事」とある

が、これが《1》に相当する。《1》は『日本書紀』『古語拾遺』『先代旧事本紀』を引用し、「内侍所大神本縁」について勘申している。

天徳年間の火災では伊勢鏡が無傷で発見された時の靈験（前掲『小右記』参照）が神鏡の神聖化を促したものと考えられるが、《1》のように神鏡の歴史を勘申する行為が行なわれたことにより、貴族たちは神鏡に対する理解を深めていったと考えられる。

2 大刀契の焼損

皇位継承儀礼で用いられるレガリアの一つに大刀契がある。《15》・第二卷《3》（以下、外記日記）には神鏡と共に大刀契に関する新出史料も含まれるので整理しておきたい。⁽¹⁴⁾

外記日記及び『日本紀略』によると、大刀四十八柄の内、四柄は清涼殿から（外記日記には脱があるか）、四十四柄（節刀を含む）は温明殿から救出された。⁽¹⁵⁾ また契七十四枚も救出され、これは全て魚形であった。契は八枚が金・十四枚が銀・五十二枚が銀塗物でできていたという。具体的な発見の経緯は前掲『小右記』所引『御記』に詳しく、温明殿からは火災翌日の九月二十四日に大刀四柄（室と握が焼失し小調度が残るのみ）と金銀銅の契符四十九隻（銘文は発兵・解兵符其国、其官などがあった）が発見され、外記日記とは異なり契には焼損があった可能性が指摘されている。また二十五日には銅の契が三十余枚（前日と合わせて七十四枚）、大刀四十柄が発見され、この中に節刀が含まれていたという。

この内、大刀については《15》所引『村上天皇御記』に詳しい記述がある。十月一日に大刀契を納める辛櫃の新造・奉納日時が勘申されたが、大刀契は行幸に必要だということで、冷泉院への遷御より前の

日時を勘申するよう仰せがあったという。⁽¹⁶⁾ 実際、天皇は避難先の職御曹司から冷泉院へ十一月四日に遷御したが、その前の十月二十八日に大刀の室・握のみが新造され辛櫃一合に奉納された（十二月十二日には大刀の研磨が行われている）。またこれに合わせて契符は八袋に入られ同じ辛櫃に奉納されている。温明殿における大刀契辛櫃の確実な初見は神鏡辛櫃と同じく『本朝世紀』天慶元年七月十三日条で、「細積等五合」の中にこの辛櫃が含まれていた。《15》所引『村上天皇御記』の記述を踏まえるに、焼失前後で大刀契の櫃は一合であったと考えられる。

天徳四年の火災では節刀も焼損したようで、十一月九日には新造の日時が勘申され、翌応和元年（九六一）六月二十八日には節刀の内の二霊剣の新造のため天文博士の賀茂保憲が五方五帝祭（『塵袋』では三方五帝祭とする）を奉仕している。続く八月七日に大刀の飾具が装着されているが、これは天徳四年に室・握が新造された大刀に対してのものである。最後に十一月四日には大刀契辛櫃の鐔の匙がレガリアである御剣の緒の中に保管されている。

以上、大刀契の火災後の動向を整理したが、まず大刀契辛櫃の鐔の匙が御剣の緒に付けられているのが注目される。《15》所引の『宇多天皇御記』によるとこれは旧例で、近年は鐔が紛失し縄で縛って保管されていたのが、天徳四年の火災を契機に元の姿に復旧されているのである。⁽¹⁷⁾ ただ『土右記』治暦五年（一〇六九）五月四日条には「天皇御璽宮……有_レ鐔矣。其鑑納_二御劍緒中_一云々」という記述がある。これに関連して『江談抄』第二・三六「御剣の鞘に巻き付けらるるは何物なりやといふ事」には藤原資仲の書を引き、資仲の父藤原資平の三条朝における逸話を載せている。それによると三条天皇が御剣の鞘に

巻き付いている物の詳細を資平に尋ねたところ、資平はある人の説として御辛櫃の鑑であると返答した。後に天皇はこの資平の見解が資平の叔父藤原実資、実資の祖父実頼と同様のものではあったと述べている。これはまさに『宇多天皇御記』『村上天皇御記』の記述と対応する（『禁秘抄』上・大刀契の記述とも対応する）。実頼は天徳四年当時（左大臣で、大刀契の焼損・修理を通じて得た知識が子孫（小野宮流）に伝わった可能性がある。一方で『江談抄』は大江斉光の説として神璽の筥の鑑であるとの見解を紹介しており、それは『醍醐天皇御記』にみえるという。これは『土右記』の記述と対応する。天徳・治暦年間には匙_二鑑が複数あったとの記述はみえないから、元々御剣の緒には大刀契櫃の匙のみ付いており、十一世紀には『醍醐天皇御記』（現存せず）を典拠に御璽の筥とする誤解が生じたのだろうか。詳細は不明であるが、十一世紀に御剣の匙_二鑑の実態が不明になっていたことが窺える。なお関白本門の鑑とする異説もある（『富家語』一八三）。

更に緒に匙を付ける際、「随_二其銘_二改_二入三囊」とあるように契符はその銘文（前掲）に従い三袋に収納され直されている。契は金・銀・銀塗物から成り、これが銘文の相違と対応している可能性も考えられる。養老軍防令17差兵条には「凡差_二兵廿人以上者、須_二契勅_一、始合_二差_二差_二」とみえ、『令義解』は「謂、有_二関国須_二契、余国皆待_二勅符_一」というように関契の規定と理解する。また公式令43諸国給鈴条には「其_二三関国、各給_二関契二枚_一」と関契の規定がみえ、『令集解』所引「古記」はこの「契」を「木契」とする。また「朱記」はこの契は関ではなく関のある国に賜うべきものと注釈する。一方、穴記は「古令」では（三関・）三関のある国しか契を支給しないが、「新令関

答軍防令」に「諸国々別有_二契_一」であるとし、不_レ依_二令条_一別生_二文也_一」とみえ注目される。これが「発兵・解兵符其国」との銘がある契に対応するのだろうか。以上のように軍防令差兵条の「契」をめぐるのは、「契」＝関契とする見解と「穴記」のように公式令の規定する関契とは別に発兵に関するものがあるとする見解があり、吉永匡史氏は後者を踏まえ軍防令差兵条の制定当時の合意としては「発兵に使用される割符である契が、関契とは別に設定されていた」と解釈している⁽¹⁸⁾。更に応和元年に新造された二霊剣といわゆる三公戦闘剣と日月護身剣を指す。この新造に際し賀茂保憲が関わったことが知られるが、これについては『塵袋』の所伝、『中右記』嘉保元年（一〇九四）十一月二日条裏書所引の「藏人信経私記」のほか、山下克明氏が紹介した京都府立京都学・歴史館所蔵『反問作法并作法』所収「大刀契事」などに対応史料が確認される。山下氏が既に注目しているが、二霊剣に関し『左大史小槻季継記』安貞二年正月二十四日条に（天徳四年秋焼損畢。仍令_二賀茂保憲朝臣被_二鑄_二改之_一。或_二□□□_一晴明殊致_二其沙汰_一。晴明今_レ鑄云々。然而天徳御記、保憲令_レ鑄之由分明也。（後略））（『大日本史料』第五編之四）とある。この割注にみえる「天徳御記」がまさに今回発見されたことになる⁽¹⁹⁾。

三 寛弘二年の神鏡罹災と神鏡定

本書の大部分を構成する《3》～《14》は、寛弘二年の内裏焼亡に伴う神鏡の焼損への対応に関連する文書である。これらの史料の性格を把握するため、まずは寛弘二年の神鏡焼損問題の経緯を概観しよう。寛弘二年十一月十五日、内裏にて火災が発生した。出火元は温明殿

『御堂関白記』は温明殿と綾綺殿の間とする)であったという。一条天皇は中宮彰子とともに神嘉殿に避難したが、神鏡と大刀契は持ち出すことができなかった。火所に埋もれたままの宝器を守護すべく、左近少将藤原重尹・右近少将源清政が近衛一人とともに派遣され、翌日の十六日に宝器の搜索が開始されるが、この日の様子は『15』文書所引の外記日記により詳しく知ることができる。⁽²⁰⁾それによると、この日重尹・清政に宣旨が下り、女官を率いて搜索が行なわれた。発見された宝器のうち、鏡二面は焼損が著しくわずかに三四寸ほどが残るのみであり、「魚形」は無損であった。なお、『御堂関白記』によれば、鏡のほかには大刀四柄・魚形金十枚・銀十五枚・銅三十枚が発見され、長殿から運んだ辛櫃に入れたことがわかる。道長は神鏡の焼損を深く嘆いたという。

十七日には、神鏡破損という前代未聞の難題に対応すべく、公卿会議が開催された(第一回神鏡定)。主たる論点は神鏡を改鑄すべきか否かである。この日の議論の詳細は明らかでないが、神鏡を改鑄する場合、本来の銅と混合してよいものか、新鑄する場合は焼け残った方の鏡とともに安置するのかなどの問題点が指摘され、藤原実資の意見によりまず神鏡の由来や準拠すべき例などを諸道に勘申させることとなった。そして『15』文書所引外記日記によれば、第一回神鏡定の結論に従い、十八日に道長が諸道博士等に改鑄の有無、神鏡の由来を勘申するよう命じたとある。そのメンバーは、大外記滋野朝臣善言、式部大輔大江匡衡朝臣、文章博士大江朝臣以言、明経博士清原真人広澄、直講海善澄、左衛門権佐令宗朝臣允亮、大判事美麻部朝臣直節、陰陽権頭秦宿祢政国であった。

『3』・『11』文書は、彼らによって後日提出された勘文そのものの

である。十八日に勘申を命じられたメンバーのうち、大外記滋野善言のみ『諸道勘文』に勘文が収載されていないが、他の勘文を見ると諸道博士はみな善言により左大臣道長の宣が伝達されているから、善言自身は勘申を命じられたのではなく、諸道の勘申に関する事務を命じられたのかもしれない。また、当初のメンバー以外の陰陽勘文『9』『11』も作成されている。

さて、『3』・『11』の勘文は、記紀など日本の典籍から八咫鏡をはじめとする神話の関連記事を調査するとともに、それぞれの専門に応じた典籍から準拠すべき記述を探し出して見解を提示している。多くの漢籍・和書が引用されており、逸文収集にも資するところ大であるがここではひとまず措き、それぞれの勘文の主張に注目したい。勘申内容の大意を諸道別にごく簡単に整理すると、以下になる。

まず紀伝勘文では、『3』は漢籍から中国の伝国璽・九鼎の記事を引用する。伝国璽とは秦始皇帝に始まるとされる帝位を象徴する印璽のことで、歴代王朝に伝えられ唐代には符宝郎が保管した。⁽²¹⁾一方九鼎とは中国全土から集めた青銅を用いて鑄造したという、皇帝の全国支配を象徴する鼎である。伝国璽は始皇帝のときに製造されたもので破損や再刻があったとの先例もあるし、九鼎は則天武后期の万歳通天元年に鑄造され明堂の庭に置かれたとの例があるから、これらに準ずれば、改鑄可能ということになるが、中国と日本の風俗の相違を鑑み判断を委ねている。また『3』では、神鏡Ⅱ天照大神Ⅱ宗廟との理解を示している点に特徴がある。『4』も伝国璽・九鼎の事例を提示し、伝国璽を管する唐の司宝の属する内侍省と日本の内侍所の対応関係を指摘し、神鏡は伝国璽・九鼎に比すべきものだから改鑄もできるとしつつも、神意は察しがたく、まず祈祷をすべきとしている。

次に明経勘文では、《5》は『日本書紀』・『大倭本記』に載せる所伝を引用する。『日本書紀』や『古語拾遺』によれば天岩戸に隠れた天照大神を引き出すための祭祀において、石凝姥神が日神を像った「八咫鏡」を天香山の金によって鑄造している。この伝承に基づき石凝姥神の末裔に香具山の金を用いて新たに鏡を鑄造させるべきと主張している。また、紀伝勘文でも述べられているが、伝国璽は秦始皇帝のときに刻されたものであるし、九鼎は唐武后のときに新鑄されているように往古より伝来してきたものではない。この例に準拠し、祈祷を行なった後改鑄すべきとする。一方《6》は、同様に神話的伝承を参照しつつ、神鏡が天照大神を象ったものであること、天孫降臨の段で瓊瓊杵尊に鏡を授けた際、「此の鏡を視ること、吾を視るが如くせよ」と命じたことなどを根拠に、あえて中国に典拠を求めるなら伝国璽・九鼎ではなく「太祖の廟像」（宗廟における天命を受けた祖先の像）であるとする。

次に明法勘文では、《7》は『大倭本記』の記述から神鏡が三面存在したこと、これらは宮中に安置されてきたため宮中に留め置くべきことを確認した上で、修理の法的根拠としては賊盗律の条文があるが神鏡については規定がないため、まず祈祷をすべきとする。《8》も同様の典籍を引用するが、こちらは神鏡が磐戸に触れ傷がついた例から、（破損しても改鑄しなかったのだから）改鑄はすべきでないと主張している。

最後に陰陽勘文であるが、《9》は五行説の観点から神鏡の焼損を重大な災異の予兆であるとし、祈祷とともに攘法を行なうことで災禍を鎮めようと主張する。《10》は適当な典拠が見つからなかったようだが、やはり祈祷と卜筮を行なうべきとする。一方《11》では、天徳

四年の内裏焼亡の際に焼亡した靈剣を新たに鑄造した例を引き、これに準じて神鏡を新鑄する可能性を示唆しつつ、やはり伊勢神宮への祈祷と卜筮をすべきとしている。

以上の勘文の内容は、ほとんどが当面の処置としては祈祷を行なうべきということで一致している。ここで注目すべきは、それぞれ根拠は異なるものの、改鑄してはならないとする説は少数派であり、改鑄可能との勘申結果を報告しているものも見られる点である。当時の學術調査の結果としては、神鏡は必ずしも唯一無二のものではなく、改鑄可能なものと位置づけられた点に留意しておきたい。

さて、《3》・《11》文書のうち、最も日付が古いのは《5》文書の寛弘二年十一月□（二十カ）九日、最も新しいのは《4》文書の寛弘三年六月十五日であり、すべての勘文が出そろうまでにおよそ半年を要したことになる。『権記』によれば、寛弘三年六月十三日に「神鏡勘文今日被_レ奏」、十五日に「依_レ召候御前、讀_レ諸道博士等勘申神鏡勘文」とあり、それぞれ神鏡勘文が奏上されている。《3》文書が提出された段階で一度奏上され、最後の《4》文書がされた後で御前の読申がなされたのだろう。

この諸道勘申を受け、七月三日に第二回神鏡定が開催された。『御堂関白記』『権記』によると、この定は殿上の御前座で行なわれた。座は除目の座と同様であったが大臣の円座はなく（左大臣道長は御簾の内側にいた）、大弁の座に当たって勘文を読む宰相の座として円座一枚を置いた。まず道長が天皇より諸道勘文を賜り、内侍所神鏡の改鑄の是非を定めるよう議題を仰せられた。道長は御簾の内側で諸道勘文を給わり、行成に勘文を読ませた。行成は円座に着し御簾に直面し、紀伝・明経・明法・陰陽の順に勘文を読んだ。参集した公卿は勘文を

聞き、その後行成は本座に着し、会議が始まった。

《12》文書は、このときの議論の結果をまとめた定文である。ただし、その性格を考える上で一点注意すべきは、第二回神鏡定は陣座で公卿のみで開かれる陣定ではなく、清凉殿の天皇の御前行なわれる御前定であったということである。公卿会議の議事録である定文は、天皇に奏上し結果を報告するために作成するものであるから、天皇が議論を目の前で聞いている御前定の場合、通常定文は作成されない。ではなぜ定文が残っているのか。これについては『権記』に注目すべき記事がある。第二回神鏡定から二日後の寛弘三年七月五日、行成は召しを受けて御前に参上した。そこで一条天皇より、先日の定について御記に書き入りたいので、定文を書いて提出するよう命じられたのである。そして同月十五日には、実際に行成が神鏡定文を奉ったとの記事がある。つまり《12》文書は、一条天皇の命により特別に行成によって作成された定文なのである。『江家次第』巻一八・陣定事には、但神鏡定時、雖御前儀猶書定文。

とあり、神鏡定は御前定であっても例外的に定文を作成するとあるが、この慣例は寛弘三年の第二回神鏡定で一条天皇が作成させたのが先例とされたのだろう。⁽²³⁾

以上により《12》文書の性格は明らかになった。次に当日の議論の様子を読み取ってみたい。⁽²⁴⁾この日の議論における各公卿の発言内容は、『御堂関白記』同日条では二つに分かれたように書かれている。一つは公季・実資・時光・隆家・忠輔・有国・行成の意見で、不完全な形であったとしても神代物である神鏡を改鑄すべきでなく、これを尊び安置すべきであるというものである。もう一つは道長・伊周・公任の意見で、諸道勘文によれば、吉凶を占うべきとのことである、決めが

たいことではあるが、勘申の通り占いを行ない、その告げにより定めるべきである、という。これらの意見を聞いた一条天皇は、「皆の意見は一致していない。もう一度定めよ」と指示し、再度意見が集約されたが、両者とも意見を変えなかった。道長は、もし改鑄・新鑄する際にもとの金をどうするか、もとの鏡の残骸をどこに安置するかなどの問題点を整理し、やはり決断したいとの意見を申している。

以上が古記録からうかがえる当日の議論の様子であるが、《12》文書によれば、それぞれの公卿がいかなる根拠のもとに、どのような発言をしたか詳しく知ることができる。それらを整理すると以下のようなになる（便宜上、史料の順に基づき番号を付したが、公卿合議は下位の者から順番に発言するため、実際の発言順序とは異なる）。

①道長・公任の意見

諸道勘文の議論は多岐にわたっており、それぞれの依拠するところは一致していない。しかし多くの意見は祈祷・亀卜をすべきとのことである。今、神鏡は焼損したとはいえ、なお遺体を崇め奉るべきか、それとも本体を改鑄するのが神意に叶っているのか。そもそも神鏡の本体は一つではないし、人間がこれを鑄造した起源も不明である。もし改鑄する場合でもその起源を知らなければ何ともし難い。神鏡の起源について詳細を再度勘申させるべきである。

②公季の意見

神鏡の事は去年、諸道勘文により対応すべきと定めたが、諸道勘文の意見は一致していないため、やはり改鑄すべきではない。

③伊周の意見

諸道勘文は日本の書物によって勘申しているが、その詳細は不明

である。海善澄の勘申によれば最初は天皇と同居した後別殿に移った。とすれば、本体をもとの場所に留め置くのは、理屈はわかるが確実な文がない。允亮朝臣の勘申によれば、神鏡は三面が天より降ったとのことだが、これは日本書紀の説と相違している。まして中国の諸説に準拠するのは相当とはいえない。さらに明経博士広澄の勘申によれば、崇神天皇の例により早く改鑄すべきとするが、後世の人間の手によってたやすく万古の神物を動かすべきではない。ただし神意は図りかねるから、諸道勘文の申すとおり祈禱を行なうべきである。もし改鑄すべきと告げがあればそのときに対応すればよいし、もし明確な告げがなければ遺体を崇め奉るべきである。

④実資・時光・行成・権中納言の意見⁽²⁵⁾

諸道博士は博識であり、その勘申結果は尊重すべきである。しかしある者は漢籍を引用し、ある者は日本の書籍に依拠し、鏡劔を中国の璽・鼎に準じて議論している。その論拠は十分ではなく、誰の見解によって是非を判断すればいいかわからない。そうした中で明法博士の勘申は、伊勢・紀伊の神宮に坐す本体について所見があり、重視すべきである。この鏡は過去に鑄造されたものであるが靈験はなお新鮮であり、今焼損したとしても神体はなお残存している。神体が残ったという事実が、その靈験を示している。したがって改鑄すべきではなく、そのまま安置し崇敬すること、朝廷は長く安泰となるだろう。

⑤権中納言の意見

諸道勘文の意見は分かれており、判断しかねる。とくに改鑄ということになるとうまく分らないので、本鏡を安置すべきではないか。

⑥有国の意見

諸道勘文には改鑄すべきと言っているものがあるが、その論拠として引用されている文を見ると、秦始皇帝は藍田山より得た玉をもって玉璽を造り、漢代に相伝され永宝とされた。始皇帝は莊襄王の子であるが、二代にして天下を失い、玉璽も賊により奪われ断絶した。一方神鏡は神が天より下され、神代から今まで、遺失することなく天皇位とともに伝来してきた。かつて中国皇帝は、「日本の天子は日を兄とし月を姉とする。故に天□と称することは、尊貴すべきである」と述べた。これによるに、秦始皇帝が璽を造ったことをもって神鏡と相比すべきではない。そもそも神鏡は灰燼の中にあり傷ついたが、円規は欠くことなく、皆神鏡の靈異に驚嘆した。神鏡の靈異は末代まで減るところなく、輝き続ける限り皇位の長久なることを表すのである。火災の後も神光なお照り続けるのは、宝鏡の靈異に他ならない。これを崇敬し万代の皇基を期すべきである。

以上が定の場合における各公卿の発言内容であるが、これらの意見を聞いた天皇は、「皆の意見は一致していない。もう一度定めよ」と、再度審議するよう命じた。再審議の場でも各公卿は意見を変えなかったが、道長は以下のような意見を残している。

⑦道長の意見

もし改鑄する場合は他の金を混ぜるのか、もとの金は恐れ多いものである。他の金で鑄造する場合はもとの金はどうするのか。損像と新像が二つ存在するのはどうか。その場合本像は禱請を加え安置すべきか。

以上の発言内容は、②・④・⑤・⑥が神鏡を改鑄せずに安置すべき

とし、①・③が改鑄の可能性を見つつ神意を尋ねるべきとしており、『御堂関白記』の整理と一致している。このうち、前者の立場の中で諸道勘文の内容を踏まえた発言をしているのは④と⑥であるが④は『7』の惟宗允亮の勘文に引用された大倭本記の説を重視している点が目される。

『大倭本記』は『本朝書籍目録』に「大和本記二巻 記神代古事。上宮太子御撰」とあるもので、逸文は釈日本紀、古事記裏書などにみえる。『諸道勘文』によつて寛弘二年以前の成立であることが確認できるが、これには神鏡について、『日本書紀』が一面、古語拾遺が二面とするのに対し、『大和本記』のみ三面としているのが特徴的である。

内侍所神鏡をはじめとする宝器は、常時は温明殿に秘蔵されているため、それがいかなる形態で何個存在しているのかなど、その具体像を公卿でさえほとんど知らず、詳細を把握しているのは近侍する女官だけであった。そのため、天徳の罹災時に初めて公卿は神鏡と対峙することになった際、まずは情報を収集し、女官の協力を得る必要があった。『15』所収外記日記によれば、賢所は三所あり（十月三日条）、これは鏡二所と「魚形」一所から構成されており、この情報が公卿らに伝えられたと思われる。そして鏡のうち一所は浦乱し破損していたが、一所は原型を留めたまま残っており、この無損の鏡が（事実としては不明だが）伊勢御神の形代と認識されたのである。

「魚形」は『小右記』寛弘二年十一月十七日条所引の村上御記に「大銅魚形二隻（女官等或傳、是亦神也。然而未知真偽。）」とあるように、女官によつて神と認識されていた長さ約六寸の金・銅製の宝器であった。ところが『小右記』同日条所引の清慎公記には、天徳の

焼亡で残った鏡は伊勢・日前・国懸の三面が存在したとされており、ここで貴族らには鏡が三面あるとの誤解が生じたい。その上で、大倭本記は鏡が本来伊勢・紀伊・卷向穴師社宮の三面存在したとの説を記している。こうした説がいつ頃成立したものか未詳だが、寛弘年間にも神鏡の位置づけは定まっておらず、三面であることが理解できるため、公卿らには大和本記の記述が目されたのだろう。

さらに、④と⑥に共通する意見として、諸道勘文が漢籍を引用し、中国の伝国璽・九鼎に準ずることで改鑄可能であるとする議論を是とせず、人間が造った璽鼎と神が下した神鏡を明確に区別すべきとしているのが注目される。ここに中国と異なる日本独自の宝器観・天皇像があらわれつつあると言えるだろう。ただし①や③のような意見が出ていること、諸道勘文の認識と異なることなどからもわかるように、この段階では神鏡についての明確な共通認識は存在せず、むしろこの神鏡定が神鏡観の形成を促した可能性がある。なお、神鏡定における道長の立場として、道長自身は積極的に改鑄を望んでいたと評価されることがあるが、道長が改鑄の可能性を考えているのはおそらく諸道勘文の結果を受けてのことであり、『12』文書の定詞を見る限りではフラットな思考のもとに対応を検討しているように感じられる。

一方、『6』のように、神鏡Ⅱ天照大神Ⅱ宗廟との理解も学者の中には成立しつつあった。内侍所神鏡神格化・天皇の宗教儀礼の変化の一段階として、寛弘二年の神鏡定が一つの画期をなしていた可能性が高く、このような視点からも本勘文のさらなる詳細な検討を要するだろう。いずれにせよ、神鏡定での議論は当時の貴族にとって極めて有意義なものだったと推察されるのである。

さらに本書には『12』の後に、『13』『14』として伊勢神宮への告文

を載せる。当時の古記録類によれば、寛弘二年の神鏡焼亡時、諸道による勘申と並行して、神鏡焼損の事実を伊勢神宮へ報告すべく、十一月三十日に日時勘申と使者の選定が行なわれている。勅使は当初宰相中将藤原経房と定められていたが、発遣の前日の十二月九日になって、経房が犬の産穢によって、急遽参議左大弁藤原行成に変更された。行成は十日に告文と宸筆の御書を下給され、内大臣公季を行事とし、告文を清書して覆奏し、勅使として伊勢神宮に運んでいる。《13》・《14》はまさにこのときの宸筆宣命と告文である。これ以降、伊勢公卿勅使は宸筆宣命を持参するのが通例となるが、《2》江記逸文に「宸筆宣命始_ニ於此_一」とあるように、その初例は寛弘二年の行成によるのであつた。その宸筆宣命の本文が確認されたことの意義は極めて大きい。

以上、『諸道勘文』《3》・《14》の内容とその意義を述べてきたが、最後にこれらの史料がまとまって収載されている理由を検討しておきたい。《3》・《14》の寛弘二・三年の関連文書は、行成が使として運んだ宣命、行成が読みあげた諸道勘文、行成が執筆した定文で構成されていることから、伝来に行成が深く関わっている可能性が高い。その点において、『看聞日記』応永二十三年（一四一六）五月二十七日条に注目すべき記載がある。

其後文書令_ニ虫弘_一。行成卿目錄櫃_ニ彼卿真跡一卷、（神鏡事依炎上_ニ可_レ奉_ニ鑄直_一哉否事、諸道勘文公卿僉議定文也。）伏見院有御奥書_ニ殊重宝也_一。而虫損散々也。取_ニ出_ニ之_一入_ニ他櫃_一。

これによれば、十五世紀初には神鏡に関する行成の真跡一卷が伝存し、そこには諸道勘文と定文が含まれていたことがわかる。すなわち、行成自身が寛弘の神鏡改鑄問題に関する書類を整理し一卷にまとめて

いたのであり、これをもとに『諸道勘文』の《3》・《14》が作成されたと考えられるのである。

四 平治の乱と神鏡辛櫃

《15》・《18》は平治の乱時に破損した神鏡辛櫃の新造問題に関連するものである。平治の乱における神鏡については既に森由紀恵氏の検討があるが、改めて考察を加えてみたい。

二条朝の平治元年（一一五九）十二月九日、権中納言藤原信頼と源義朝らが謀反を起こした。十七日には少納言藤原通憲（信西）の首が献上され西獄門前の樹に曝し首にされ、二十五日には二条天皇と中宮妹子が大内から平清盛の六波羅亭に移っている。二十六日、官軍が大内に派遣され、信頼以下と六条河原で合戦となり、信頼は討ち取られている。翌永暦元年（一一六〇）正月九日に源義朝らの首が東獄門前の樹に曝されている（以上、『百鍊抄』による）。

この平治の乱における神鏡の動きについては、『百鍊抄』永暦元年四月二十九日条に、

内侍所神鏡奉_レ納_ニ新造辛櫃_一。去年十二月廿六日、信頼卿乱逆之間、師仲卿破_ニ御辛櫃_一、奉_レ取_ニ御鉢_一。於_ニ桂辺_一經_ニ一宿_一、其後奉_レ渡_ニ清盛朝臣六波羅亭_一、造_ニ仮御辛櫃_一奉_レ納_ニ、自_ニ師仲卿姉小路東洞院家_一所_ニ還_一御温明殿也。左中将忠親朝臣依_ニ長久例_一候_レ之。自_ニ今夜_一三ヶ夜御神楽。

とあり、大内に官軍が派遣されたその日、源師仲が辛櫃を破壊して神鏡を取り出している。師仲は桂辺で一宿の後、六波羅亭の平清盛に帰降し、神鏡は師仲の姉小路東洞院家から大内に移されている。なお

『古事談』第一・王道后宮にも関連記事がある。

平治乱逆之時、師仲卿奉_レ取_レ内侍所_二奉_レ安_一置家_{（姉小路北、東洞院西南角云々）}之車寄妻戸中。其体新外居_{（足高）}之上數薦一枚、乍_レ裏奉_レ置_{（云々）}。翌日奉_レ尋出、内侍一人・博士已_レ下女官等参_レ仕之。奉_レ裏替_一之後、渡_レ御大内。供奉職事一人・近将二人_{（云々）}。

以上は従来知られていた神鏡の動向であるが、『諸道勘文』第二卷《3》所収の日記などに基つき、より詳細な経緯をみていくことにしよう。

まず尊経閣文庫所蔵『局中宝』第四冊・着衣冠布衣事に次の記述がみえる。⁽²⁸⁾

永暦元年正月十四日、早旦念_{（通）}後、参_{（藤原忠実）}知足院殿_{（入道殿）}。召_二御所_一、数刻祇候。_{（中略）}予謹奉_レ仰次、被_レ仰_二内侍所事_一。奉_レ納之物、非_二唐櫃_一為_二厨子_一也。数刻祇候、晚頭退出。_{（九節。仰_二身内侍所厨子事_一。内弁尚軋_二拜者_一拜尺_二也_一）}

これによれば、永暦元年正月十四日には神鏡は辛櫃ではなく厨子に奉納することになっていた。しかし『諸道勘文』第二卷《3》によると、二月十一日には神祇官を行事所として辛櫃の製作が始まり十八日の奉納が決まるなど、先例に倣い神鏡は辛櫃に奉納する方針に変わっていた。⁽²⁹⁾十八日には祈年穀奉幣が行なわれ伊勢・石清水・賀茂の各社に神鏡のことが報告されたが、辛櫃の新造は遅れたようで、四月十九日になつて辛櫃は皇居八条殿の内侍所に移され神鏡が奉納されている。遅延の理由は辛櫃の寸法が定まらなかったため、内裏の穢もあつて四月までずれこんだという。⁽³⁰⁾奉納にあつては前日から内侍所女官が内侍所に参籠して御祈を行い、奉納当日から三日の間は臨時の内侍所御

神楽が実施されている。三日にわたる臨時内侍所御神楽の実施は長久元年（一〇四〇）の皇居上東門院の焼亡以来で、その詳細は大部分が未翻刻である宮内庁侍従職所蔵、東山御文庫本『内侍所御神楽部類記』（勅封二二六―七）に確認できる。⁽³¹⁾五月三日には神鏡を新造辛櫃に奉納したことを報告する七社奉幣が実施された。

《15》（《18》は、以上の辛櫃新造の過程で作成された文書である。前述のように神鏡の辛櫃への奉納が遅れた一因は辛櫃の寸法が定まらないことにあつたが、永暦元年二月十三日付の《15》は「永暦元年外記_{（元）}勘文 勘_下申坐_二内侍所_一神鏡可_レ奉_レ納_二新造韓櫃_一間雜事例_上事」）として天徳・寛弘・長久年間の内裏火災における神鏡辛櫃の新造の具体的経過の先例を外記が勘申した文書で、行事所設置の二日後に出されている。引勘されているのは天徳・寛弘・長久罹災時の外記日記と宇多・村上の御記、および長久度罹災時の『春記』であり、『諸道勘文』第二卷《3》にもほぼ同じものが引用されている。

この外記勘文には不審があつたため、藏人頭右大弁藤原資長は「別紙」に不審の条を記し、四月十一日に右大将（権大納言徳大寺公能）の下に書状を送った。これが《16》であり、後半部分が「別紙」にあたる。「別紙」は天徳・寛弘・長久年間の辛櫃新造についての先例に基づく所見を述べたものである。さらに翌十二日、再度右大弁資長は右大将公能の下に《17》の書状を送っている。これは前日の書状の内容を踏まえ、辛櫃に関する検討を当日中に返信するよう求めている。そしてこの《17》に対する公能による四月十三日付の返信が《18》である（充所が欠けており《18》は案文の写しの可能性がある）。《18》の文面を見る限り公能は《15》の勘文を見て判断を下しており、これに従い辛櫃を新造、十九日に神鏡が奉納されたという経過になる。

『諸道勘文』の登場により天徳年間から院政期にかけての神鏡辛櫃の様子はかなり詳細に追えるようになった。その検討は別稿に委ねたいが、永暦年間の神鏡辛櫃をめぐる寸法や金物・奉納時の作法・臨時御神楽の実施など長久元年（二〇四〇）の火災時の対応に倣っているのが注目される。

結語

以上、『諸道勘文』の書誌を整理し、さらに記載内容から平安中後期の神鏡をめぐる事件を再検討した。当該分野を中心に古代史研究の進展に少しでも寄与することができれば幸いである。翻刻・読解の誤りは多々あるかと恐れるが、どうか諸賢の御叱正を乞う。

註

- (1) 高田義人・臼井和樹「九条本『諸道勘文 神鏡』所収の寿永二年諸道勘文について」（小原仁編『変革期の社会と九条兼実―『玉葉』をひらく』勉誠出版、二〇一八年）。以下、両氏の引用は全てこれによる。
- (2) 斎木涼子「11世紀における天皇権威の変化」（『古代文化』六〇・四、二〇〇九年）、同「内侍所神鏡をめぐる儀礼」（『洛北史学』一九、二〇一七年）など。
- (3) 姚晶晶「諸道勘文 神鏡」所引『唐曆』新出逸文の紹介と検討（『関西大学東西学術研究所紀要』五〇、二〇一七年）。以下、姚氏の引用はすべてこれによる。
- (4) 『九条家記録文書目録』については、松澤克行「寛永文化期にお

ける九条家文庫点描」（『文学』一一三、二〇一〇年）、神戸航介「宮内庁書陵部所蔵九条家本『諸次第等目録』について」（田島公編『禁裏・公家文庫研究』六、二〇一七年）を参照。

- (5) 和田英松『本朝書籍目録考證』（明治書院、一九三六年）二〇四―二〇五頁。

- (6) 『諸道勘文』第二卷《3》にも同様の外記日記が引用されている（以下、『諸道勘文』第二・三巻は註（1）高田・臼井論文の⑬～⑲にあたる部分を第二巻《1》～《3》、⑳～㉒を第三巻《1》～《3》と表記する）が、両者の間で相違が多く見られる。本稿は両者を参照して執筆したが、引用に際しては所収記事の多い《15》の方を使用した。なお《15》・第二巻《3》の寛弘年間記・長久年間記も外記日記であろう。

- (7) 外記日記が『日本紀略』の編纂に活用されたことは既に註（5）和田論文、平田俊春「日本紀略および本朝世紀前篇の批判」（同『私撰国史の批判的研究』国書刊行会、一九八二年）、木本好信「『外記日記』について」（同『平安朝日記と逸文の研究』おうふう、一九八七年）、石井正敏「『日本紀略』」（石井正敏著、荒野泰典・須田牧子・米谷均編『石井正敏著作集4 通史と史料の間で』勉誠出版、二〇一八年、初出二〇〇一年）などが指摘している。

ところで『諸道勘文』《6》に「日本史記略」とその「注」が引用されている。『本朝書籍目録』帝紀にみえる「日本史記略」は現在伝わる『日本紀略』と同じものと一般的に考えられており、《6》所引のものにあたる可能性がある。内容から判断して《6》所引のものは、本文は神代、注は崇神朝に関わる記述であ

る。現存する『日本紀略』の諸本の内、神代巻は久邇宮家旧蔵本（現・宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵、函架番号…553・6）とそれを書写した谷森本（現・同所蔵、函架番号…351・652）があり（前掲石井論文参照）、現行の『新訂増補国史大系 日本紀略』前篇は久邇宮家旧蔵本を底本としている。久邇宮家旧蔵本の神代巻は丹鶴叢書本『日本書紀』で、坂本太郎氏は原『日本紀略』に神代巻はなかったと推定した（坂本太郎『六国史』吉川弘文館、一九七〇年）が、寛弘三年以前に神代部分の記述を含む『日本史記略』なる書物が存在したことが明らかになった。現行の『日本紀略』の六国史の時期に相当する部分は、神代部分を除き六国史の抄出とされているが、『6』所引の本文は『日本書紀』第九段（天孫降臨神話）と対応しない。また注は「紀云」として崇神紀六年条に相当する内容に次いで「神人語曰」と続けるが、「紀云」の内容は崇神紀の記述を抄出したものというよりは『日本書紀』の神代・崇神朝部分を簡潔に要約したようにみえ、現行『日本紀略』崇神天皇条にも全く対応しないので、『6』が引く「注」は「日本史記略」の神代部分の注とみるべきかもしれない。そして「日本史記略」の本文が伝える鏡二面が天孫降臨神話で天孫に伝えられ、それが伊勢・紀伊に鎮座するという神話は記紀や『古語拾遺』と厳密には対応せず、先行する古典を踏まえた新たな神話理解といえる。このような記述のあり方からみて、「日本史記略」の神代部分の記述は『日本書紀』の単なる抄出ではなく、『日本書紀』などを基に作成された新たな神話とみるべきである。ここで気になるのは『新日本紀』巻八・述義四・神代下の「宝祚之隆当与天壤無窮者矣」に「大問云、拠此文者、不可

限百王鎮護」歟。先師申云、百王者、唯上数之衆多歟。且百王鎮護之詞、不載日本紀。如大倭本紀・初天地本紀等文」者、子々孫々千々万々云々」とみえることで、傍線部分が「日本史記略」の本文と対応する（吉田家日次記「応永九年七月二十二日条も参照）。つまり『6』は『大倭本記』（本文で後述）や『初天地本紀』を「日本史記略」と誤った可能性があるが、「日本史記略」が『大倭本記』などと同一の書を典拠とした、あるいは「日本史記略」を『大倭本記』が引用した（逆の可能性もある）可能性も考えられ、現状では判断がつかない。現行の『日本紀略』と『6』が引く『日本史記略』が全く対応しないことから、『6』の「日本史記略」（『本朝書籍目録』のものと同一の書か）と『日本紀略』は別物とみるべきかもしれない。

またもう一つ問題となるのが『日本紀略』の成立の時期・過程である。現行の『日本紀略』は神代後一条天皇の時代を収めるが、『諸道勸文』『6』所引の『日本史記略』がもし『日本紀略』であれば、『日本紀略』の編纂におけるいくつかの段階を想定する必要がある。以上の問題点については今後の検討を待ちたい。

(8) 『扶桑略記』にも関連史料がある。そこには伊勢鏡に関し「徑八寸許」とみえ、「長」で大きさが表現される「魚形」とは異なり「徑」で大きさが表現されている。

(9) 大石良材「大刀契」（『日本王権の成立』塙書房、一九七五年、初出一九七一年）、註（2）斎木「11世紀における天皇權威の變化」。

(10) 和田註（5）書九頁。

(11) 北川和秀「日本書紀私記」(皆川完一・山本信吉編『国史大系書目解題 下巻』吉川弘文館、二〇〇一年)。

(12) 北川和秀「日本書紀私記」丁本について(『群馬県立女子大学国文学研究』二〇、二〇〇〇年)。

(13) 『大倭本記』の文章は『諸道勘文』《5》・《7》・《8》、卷二『1』(『日本書紀』の「一書」として所引)・《2》、卷三『2』、『新日本紀』卷七・述義三・神代上・紀伊国所坐日前神也、『明文抄』一(『続群書類従』本を使用、「日本紀」として所引)、紀俊「官幣大社日前神宮・国懸神宮本紀大略」(一九一六年)の降臨事(「当宮古記」として所引)・当宮別号之事(「古記」などとして所引)所引のものを相互に参照・校訂した。『紀伊続風土記』卷之十三・名草郡第八・日前国懸両大神上(高速記録株式会社、巖南堂書店、一九六八年のものを使用)に所引のものは『新日本紀』を孫引きしたものと考えられる。いずれも誤写・脱・省略が多く、記述を結合し原文と思われるものを作成したことをお断りしておく。文字が確定できない箇所はイで表現した。

(14) 大刀(節刀)・契・符に関する主要な先行研究として蘭田香融「護り刀考」(同『日本古代の貴族と地方豪族』塙書房、一九九一年、初出一九六四年)、註(9)大石論文、東野治之「護身劍銘文考」(同『日本古代本簡の研究』塙書房、一九八三年、初出一九八〇年)、勝浦令子「日本古代の割符「契」について」(『史学論叢』一〇、一九八二年)、岸俊男「古代刀劍銘と稲荷山鉄劍銘」(同『日本古代文物の研究』塙書房、一九八八年、初出一九八四年)、吉永匡史「軍防令と軍事制度」(古瀬奈津子編『古代文学と隣接諸学5 律令国家の理想と現実』竹林舎、二〇一八年)

がある。

(15) 「有「金銀涌乱一斗余許」を『日本紀略』は契の記事にかけるが、契は無傷であったと明記があるので、外記日記のように清涼殿から発見された四十四柄の部分にかかる記述とみるべきである。

(16) 大刀契が天皇の行幸に随行することは大石前掲注(9)を参照。

(17) なお「中右記」嘉保元年(二〇九四)十一月一日条には同年の堀河院火災による大刀契の焼失の対応の中で、「節刀櫃」の本様が「無鑲鑑、只以繩結之」であったとする。これは寛平年間と同様の対応である。

(18) 吉永註(14)論文。なお「其官」の銘のある契は隨身符の可能性が高いと註(14)勝浦論文が指摘している。

(19) 山下克明「陰陽道と護身劍・破敵劍」(『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、一九九六年、初出一九九二年)。また「反問作法并作法」の全文・書誌は山下克明「若杉家文書『反問作法并作法』「反問部類記」」(『東洋研究』一六四、二〇〇七年)を参照。

(20) 『日本紀略』同日条に同様の記事があるが、内容が大幅に省略されている。

(21) 駒井義明「伝国璽について」(『芸林』一四二、一九六三年)などを参照。

(22) 小杉一隆「九鼎考」(『史観』三八、一九五二年)などを参照。

(23) 大津透「撰関期の陣定」(『山梨大学教育学部研究報告 第一分冊』四六、一九九五年)三九頁。

(24) 従来の史料から読み取れる寛弘の神鏡改鑄問題については倉本一宏「撰関期の政務と儀式」(『撰関政治と王朝貴族』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九九四年)に詳しい。

- (25) 『御堂関白記』によれば、この神鏡定に参加した権中納言は源俊賢と藤原忠輔の二人いて、④・⑤の「権中納言」がそれぞれどちらなのか判断できない（どちらかが「新中納言」の誤写だろう）。本書には④の方に「俊賢歟」との書き入れがあるが、その真偽は不明とせざるを得ない。

- (26) 例えば、(9) 論文三一〇―三一二頁など。

- (27) 森由紀恵「中世成立期の平安京と内侍所神鏡」(『奈良歴史研究』八〇、二〇一三年)。

- (28) 前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成52 局中宝』(八木書店、二〇一二年)を翻刻。『局中宝』は鎌倉時代の中原師光の作である。同書の書誌については遠藤珠紀「尊経閣文庫所蔵『局中宝』解説」(同)を参照。遠藤氏は本文で掲げた部分の典拠を外記日記と推測し、おそらく記事の配列順から永暦二年のものとの可能性を示すが、内容から永暦元年のものと考えてよい。

- (29) この日に伊勢臨時奉幣も実施されている。この時の宣命が『神宮雜例集』巻二「第六、内侍所事」に引用されている。

- (30) 『百鍊抄』は奉納の日を四月二十九日とするが十九日の誤りだろう。

- (31) 臨時三夜内侍所御神楽と東山御文庫本『内侍所御神楽部類記』については猪瀬千尋「三ヶ夜内侍所御神楽をめぐって」(『中世王権の音楽と儀礼』笠間書院、二〇一八年)に言及がある。『内侍所御神楽部類記』は東京大学史料編纂所のHi-CAT Plusを参照

〔付記〕 本稿の作成にあたってご協力くださった田島公氏、および原本調査や翻刻をお許しいただいた宮内庁書陵部、前田育徳会尊経

諸道勘文 神鏡 第一卷 翻刻

【凡例】

1. 字体は常用漢字を用いた。
2. 典籍の引用箇所は、可能なかぎり出典を注記した。
3. 典籍の引用箇所など通行本を参照し、欠損部分や誤写など推測可能な字句の傍らに校訂を付した。
4. 底本に存在する朱点・附訓などは省略した。

【翻刻】

◎内題

諸道勘文 神鏡

◎表題 1

神鏡事

天徳四年

式部少録秦敦光

寛弘三年

東宮学士匡衡朝臣 陰陽博士吉平等

《1》天徳四年式部少録秦敦光奏状

「記云、左」「又令奏式部」「」

侍所「事」

一日本紀云、高皇産靈尊因勅曰、吾則起樹天津神籬及天津磐境、当

為吾孫奉斎矣。汝天兒屋命・大玉命、宜持天津神籬、降於葦原中国、亦為吾孫奉斎焉。及使二神、陪從天忍穗耳尊以降之。是時、天照大神、手持宝鏡、授天忍穗耳尊、而祝曰、吾兒視此宝鏡、当猶視吾。可同床共殿、以為斎鏡云々。天津彦火瓊々杵尊、降於日向穗日高千穗之峯。又曰、故天照天神、乃賜天津彦々火瓊々杵尊、八坂瓊曲玉・八咫鏡・草薙劍、三種宝物。

一先代旧事本紀曰、一古語拾遺云々。一神武天皇戊午年六月、天皇「（独与皇子手研耳カ）」命、「（命軍カ）」而進、至熊野荒津。因「（野高カ）」倉下。忽「（夜夢、天カ）」照大神、謂武甕雷神曰、葦原中国猶聞喧擾之響。

宜汝更往而征之。武甕雷神対曰、雖予不行、而下予平国之劍、則国将自平矣。天照大神曰、諾。時武甕雷神、謂高倉下曰、予劍号韶靈。今当置汝庫裏。宜取而献之天孫。高倉下曰唯々而寤之。明旦、依夢中教、開庫視之、果有落劍、倒立於庫底板。即取以進之。

一先代旧事本紀云々。謹檢案内、宝鏡是天照大神授天忍穗耳尊八咫鏡也。靈劍也。靈劍落立於庫之底、故師靈也云々。事多不具記。

《2》内侍所根元事

内侍所根元事「付同御神樂事」

江帥記云、内侍所者神鏡也。本与主上御同殿。故院「後三条院」被

仰云、帝王冠巾子左右有穴。是内侍所御同殿之時、主上夜不能放冠給御眠之時、御冠屢落。仍以挿頭花自巾「（子カ）」穴通御髻也。垂仁天皇世、始「（御別殿。故院被仰云、内侍カ）」所神鏡昔飛上欲上天。女官懸唐衣「（奉引留カ）」依「（此縁女官所カ）」守護也。天「（能カ）」内裏焼亡、飛出着南殿前桜。

小野宮大臣警称、神鏡下入其袖。寛弘焼亡始焼給。雖陰円規不闕之由、

「^{〔諸道勅〕}」申。被立伊世使^{〔公卿行成〕}。宸筆宣命始於此。長久燒亡燒失。件夜以少納言經信為使奉出。女官誤先出大刀。次欲出神鏡之處、火已盛不可救。後朝灰有光。集之入唐櫃。自一条院御時始有十二月內侍所御神樂也。

《3》寬弘三年六月十三日大江匡衡勸文^{〔紀伝勸文〕}

神鏡勸文^{〔匡衡 紀伝〕}

勘申坐内侍所神鏡燒損可改鑄乎可相准之事若有所見乎事

後漢書注^{〔5〕}曰、皇帝六璽、皆玉螭虎紐。文曰、皇帝行璽・皇帝璽・皇

帝信璽・天子行璽・天子信璽。皆以武都紫泥封之。玉璽譜^{〔之説〕}曰、

伝国璽是秦始皇初定天下所刻。其玉出藍田山、丞相李斯所書。其文曰、

受命于^{〔天 既寿永昌 至王莽篡位 就元后求〕}「璽」、「^{〔不与乃之〕}」出璽投地。璽

上螭一角缺。「^{〔玉之方〕}」方寸璽、秦以来天

子独称璽。又以玉群下^{〔莫得之〕}用其^{〔玉之方〕}

唐典要略^{〔6〕}曰、《符宝郎掌天子^{〔承百方〕}》「^{〔八宝及方〕}」国之符節弁其所用。八宝、一

曰《神宝》^{〔承百方〕}所以^{〔承百方〕}王鎮万国、二曰受命宝^{〔承百方〕}所以修封禪礼神祇、

三曰皇帝行宝^{〔承百方〕}《答疏於王公則用之》、四曰皇帝之宝^{〔承百方〕}《旁来勲賢則用

之》、五曰信宝^{〔承百方〕}《徵召臣下則下之》、六曰天子宝^{〔承百方〕}《答四夷書則用之》、

七曰天子之宝^{〔承百方〕}《慰撫蛮夷則用之》、八曰天子信宝^{〔承百方〕}《發蕃国兵則用之

天子之信古曰璽、今日宝。其用以玉。凡大廟會則捧宝以進

宝。其用以金御座。車駕行幸、則奉宝以從于黃鉞之内。《今元正朝會

則進神宝及受命宝。若行幸則合為輦、函緣封盛以從之。》

玉璽記^{〔7〕}曰、面文曰、受命于天、既寿永昌。璽上隱起為盤龍。背文曰、

受天之命、皇帝寿昌。方四寸鈕五龍盤。

晉書^{〔7〕}曰、乘輿六璽秦制也。又有秦始皇藍田白玉螭獸紐、在之六璽之

外曰、受天之命、皇帝寿昌。漢高祖佩之^{〔後説方〕}。世名曰伝国璽。与斬蛇劍為乘輿前宝。唐太宗貞觀十六年刻受命玄璽。白玉為螭首。□文曰、皇帝置命、有德者昌。

「^{〔象 仍令著方〕}」文之称知吉□亡、能輕重行息不^{〔背方〕}」

「^{〔背方〕}」而五□自生、黃帝採首山銅鑄鼎。夏□□有德

也。遠方□□貢金九牧。使蜚廉折金於山川而陶鑄于昆五六。九鼎方

而三足、不炊自烹、不舉自藏、不遷自行。罔写象物、鑲於鼎側、使民

知神威、民入山林山沢、魑魅魍魎莫能逢之。用能協于上下、以承天本

一枝。万神之所享為於昆吾之墟。^{〔8〕}

漢書志^{〔9〕}曰、聞昔秦帝與神鼎一、一者一統天地万物所繫象也。黃帝作

宝鼎三、象天地人。禹収九牧之金、鑄九鼎、象九州。皆嘗觴上帝鬼神

戰国策^{〔10〕}称、齊□周求九鼎、願率謂齊王曰、昔□代殷取九鼎、一鼎九

万人挽之鼎、八十一万人挽之。

拾遺記^{〔11〕}曰、少典之子採首山之銅鑄為天鼎。先望其国有金光動氣奔而

往視三鼎。又曰、兔《鑄九》鼎。五者應陽法、四者以象陰數。鼎中

水常滿以古氣象之休否。彼世聖人乃後禹之跡代々鑄鼎焉。

会要^{〔13〕}云、唐万歲通天元年四月三日、鑄九鼎成、置于明堂之庭。各

名武興、雍州鼎名^{〔長安、兗州鼎名曰觀。方〕}「^{〔受一千二百石方〕}」、冀州鼎

州鼎名車厚。揚州鼎名江都。荊州鼎^{〔名江陵方〕}。梁州^{〔名徐方〕}。青州鼎^{〔名徐方〕}。小徐楊

高一丈四^{〔尺方〕}。受一千二百石。用銅五十六万七千一百^{〔斤方〕}。鼎上各写本

州山川物產之^{〔象 仍令著方〕}「^{〔作郎賈膺福。殿丞薛昌容。鳳閣主事李元}

振。《農錄事鐘紹京等分題之。左尚令曹元廓画。仍令宰》相諸王率

南北宿衛兵十^{〔萬人〕}人并仗内外大白^{〔象等共曳之。〕}自玄武門外曳入。天

后^{〔自制曳鼎歌之令曳者唱和焉。〕}九鼎成。制令以黃金子^{〔千之〕}納言

姚璿諫曰、夫鼎者神器、貴在質朴自然。無佞別為浮飾。臣觀其狀、先有五采輝煥。錯雜其間、豈待金色方為炫輝。從之。

春秋演孔圖曰、有人卯金、輿輿豐繞握天鏡。(14)宋均注曰、謂劉出豐領天下鏡。大戴禮曰、武王鑑之銘曰、見爾前、必慮爾後。(15)集曰、鑑鏡也。

孝經援神契曰、神靈滋液百寶。則珠母璣鏡。(16)宋均曰、事神明、神大珠有光可為鏡。

唐曆曰、開元中鴻臚曰、蛮国銅魚多有散失。望更令所司改造魚。制曰、可。故事悉置銅魚。雌雄相合。

案之、神鼎有□□聖主□□夏禹鑄之。准堯禹跡後「
」也。漢□□□□太宗造之。唐家九鼎「

「劍二同□者。神聖之鏡劍、謂聖信也。猶云神明之徵信、此□□□□(即以鏡之)

劍稱聖。唐令所云、聖者以白玉為之印。帝王世歷云、秦制伝国璽是風俗各別、号同実殊耳。(17)又廟者貌也。天照大神者古帝皇也。鏡者貌也。神代雖鑄、末代之人若有明信宗廟靈神、何不歆享。神有三神。

所謂天地人也。人則神也。明堂者宗廟也。明堂燒改造。明堂其下雜鑄九鼎置之。但本朝之事雖准的唐家、或有可法則、或有不可法則。土俗異風、唯俟聖範時儀。

右依宣旨勘申如件。

寬弘三年六月十三日 正四位下行東宮學士大江朝臣臣衡

《4》寬弘三年六月十五日大江以言・藤原弘道勘文(紀伝勘文)

勘申

坐内侍所神鏡燒損改鑄如何有可相擬乎事

「一者」(統)。天地万物所繫終也。黄帝作宝

鼎三、象天地人也。禹収九牧之金鑄九鼎。又曰、黄帝採首山銅鑄鼎於荊山下。

左伝宣公三年伝曰、定王使王孫滿勞楚子。々々問鼎之大小輕重焉。

対曰、在德不在鼎。昔夏之方有德也、遠方図(図、書山川奇異之物而献之也)貢金九牧、鑄鼎象物、百物而為之備、使民知神姦。故民入沢山林、不逢不若。魑魅罔兩、莫能逢之。用能協于上下、以承天休。桀有昏德、鼎遷于商。載祀六百。商紂暴虐、鼎遷于周。德之休明、雖小重(不可遷也)。其姦廻昏乱、雖大輕也。

符瑞図曰、神鼎者仁器也。蓋質文之精、知吉凶存亡。而祭於昆吾之□也。周末入秦。或曰没於泗水。

唐曆曰、万歲通天二年夏四月三日戊辰、鑄九鼎成、置于明堂之庭。

各依方面列焉。鼎上各写本州山川物産之像、率南北宿衛兵十万人并休内外大牛白馬等「
」曳「
」

「
」負図□有璽章文曰、天子璽符。

太宗実録曰、貞□(觀)「
」(安主)「
」卯有事於南郊。太宗昇壇皇太子從尊。(從尊)

初十六年太宗遺刻受命□(安主)玉璽、白玉螭首。其文云、皇天景命、有德者昌。並神筆隸書、然後鐫勒。是日侍中負之以從。玉璽記曰、玉璽

者伝国璽也。秦始皇、取藍田玉刻而為之。其書李斯所製。面文曰、受命于天、既寿永昌。璽上隱起為盤龍。文曰、受天之命、皇帝寿昌。方

四寸。秦滅伝漢、王莽為元后校之于地、遂一角缺。莽滅、校尉公賓就収璽綬詣更始於宛。更始敗、以璽上劉盆子。建武三年、盆子降、上光武

祠于高廟、受伝国璽。至靈帝之後、掌璽者投於井中、為孫堅所得。袁術拘其妻而奪之。術死、荊州刺史徐璆得之。漢滅魏至三日、懷帝璽没

于劉聰。々死劉曜得之、伝於石勒・石季龍。々磨其隱起文、刻其傍為文曰、天命石氏。

漢旧儀曰、天子有六璽。皆以武都紫泥封、青布囊白素裏。

大唐六典⁽²¹⁾曰、符宝郎掌天子八宝及国之符節、弁其所用。有事即請於内、既事則奉而藏之。一曰、神宝。所以承^(百王カ)鎮万国。二曰、受命宝。所以^(修)封^(神)礼神祇。^(三)曰、皇帝行幸^(用之)答藏於土^(カ)。公則^(用之)。四曰、^(七カ)皇帝之宝。劳來勲賢^(則カ)用^(之)。五曰、皇帝信宝^(則カ)。徵召臣期用之。六曰、天子行幸^(則カ)。答四夷書^(カ)。則用之。七曰、天子

之宝。慰撫蛮夷則用之。八曰、天子信宝。發蕃国兵^(則用之)。又^(同カ)曰、同宝掌琮宝符契^(具カ)。凡神宝・受命宝・銅魚符及四方伝符、皆識其行用之別安景、具立文簿、外用^(司カ)請用、執狀奏聞^(カ)。

拋此等文、昔伏羲氏初興神鼎。黄帝夏后、或象三材、或象九州、往々鑄之、皆嘗觴上帝鬼神。自介以降、輕重行息。周成王定于郊鄠。

秦始皇求於彭城。漢武帝得之汾陰。唐武太后置之明堂。又神璽起自唐虞之降後世置内侍省、使司宝掌矣。唐太宗貞觀中修繕斯。皆歷代神宝載籍極博。所謂内侍省者内侍所也。司宝者女官属之。今件神鏡、天照大神閉磐戸之時、諸神會議、於天安河鑄作、累聖相承、奉安内侍所。国典所伝数家異説。総其大較、不過於斯代。則漢家神鼎神宝与朝家神鏡、所興造所安置各可准拋。修飾改為亦雖云可因修、神意難察。須尤龜兆。

寛弘三年六月十五日 正五位下行文章博士兼備後權守大江朝臣以言

正五位下行東宮学士兼大学博士藤原朝臣弘道

《5》寛弘二年十一月□九日清原広澄勸文(明經勸文)

勸申「明」「」

神鏡事

一勘日本紀、天地開闢之初、伊弉諾・伊弉冉二神、共為夫婦、生大八州国及山川草木。次生日神・月神也。日神者天照大神也。天照大神

生正哉吾勝速日天忍穗耳尊也。正哉吾勝速日天忍穗耳尊生天津彦火瓊々杵尊也。則此尊始以天降於日向穗日尚千穗之峯。于時天照大神、手持宝鏡、授賜而祝之曰、吾兒、視此宝鏡、当猶視吾。与同床共殿、以為齋鏡也。二説云、為天璽矣。

大倭本記云、天照大神以命天御孫命名天津彦々火丹々杵尊、而欲令知於葦原中国事。依指奉八咫鏡三面・玉鈴、取持神寿日、吾皇御命、以此物奉得、而天降以安平国聞食之。奉二鏡者吾御魂靈為大神。之一鏡与玉鈴二物、吾御孫命之朝夕御食之食向之治祭神、而幸安国所知之。天津彦々火瓊々杵尊

彦火々出見尊

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

已上神世三代元年紀

神武紀云、自天祖降跡以逮于今一百七十九万二千四百七十余歲也。神武天皇以後至于明時御宇六十六代、起於此天皇元年辛酉、至于今年(寛弘二年)乙巳合千六百六十一年。

今檢故事、此神鏡者天津彦々火瓊々杵尊天降以後、為神宝伝来六十九代。今年十一月十五日夜禁中火災、已以燒損。重檢事情、昔者神代之初、天照大神、入于天石窟、閉磐戸而幽居。于時六合悉闇、不知昼夜。因之八十万神會議、命石凝姥神探天香山之金、象於日像、以鑄神鏡奉鑄。則天照大神開磐戸、而出坐之。又至于磯城瑞垣朝、漸畏神威、同殿不安。故令石凝姥神裔・天月一神裔二氏更^(照大神及草薙劍カ)「神武⁽²⁵⁾曰、所献神璽鏡・劍。殊立磯城神籬奉遷天」。神武天皇戊午年、賊虜防塞要絶、往還難通。爰天皇感夢取「土造天平瓮、以祭天社国社、悉擊群虜也。抑古賢有言曰、温故而知新可以為師矣。方今天香山者取金鑄鏡、取土造器、禱請神祇皆有明驗。又石凝

姥神氏者兩度為鑄神鏡之工矣。然則依上古例採天香山之金、令彼石凝姥神種胤之者、新鑄造之、神明自有感応之乎。

一勘經史、天地形別初有天皇氏・地皇氏・人皇氏・五龍氏・神農氏・燧人氏。

已上六代求有

(26) 年紀政化難尋檢之。

伏犧〔孔安國古文尚書序云、伏犧氏之王天下始昼八卦。造書契、以代結繩之政焉。〕・神農・黃帝・少昊・顓頊・帝嚳・帝摯・唐堯并八代者、皆依聖德雖治天下、只受王者之祥瑞、无有相伝之神器。舜時黃龍負圖出置舜前。圖中有璽。章文曰、文皇璽符焉。又禹時令貢九州之金、鑄九鼎於荊山、奉祭上帝鬼神、以為宝器。則夏殷周受伝八十六代。

〔夏世十九代、殷世三十代、周世三十七代。〕□□□□。秦時始皇求之

不伝。因之昭襄王以後及于「(案始カ)」。漢武帝・後漢明帝共

得宝鼎、以為夏之九鼎、未詳所拠之文。又□□皇初定天下刻伝国璽。

其文曰、受命于天、既寿永昌。前後而漢同以受伝之十六代。魏黃初元

年庚子以後、至于隋義寧元年丁丑三百九十八年者天下多分。此伝国璽

或得之、或否之。又唐興萬歲通天二年丁酉、〔大唐起於武德元年戊寅

至于萬歲通天二年丁酉合八十年也。〕武后鑄九州鼎、各依方面(列カ)焉。

方今案之、舜時璽符者黃龍所負、上天之命也。而彼世不見所相伝之。

及于秦時始皇刻伝国璽。自漢以後、相伝以為受命之驗。又夏九鼎者禹

之所鑄上古神器也。而入於泗水、數代之後、唐時武后新鑄九鼎矣。抑

聖朝神鏡者、天祖降跡以來、為洪基之鎮衛。凡厥効驗非可敢比量之。

然而至于事之非常、何无隨時之義。然則一取唐朝之旧事、以為准的、

一禱天地之神靈、可改鑄之歟。

右、大外記滋野朝臣善言仰云、左大臣宣、奉勅、安置於内侍所神鏡、

今月十五日□禁中大(案損カ)□□□□□□□□□□有可相准之乎。宜勸申者。

勘申如件。

寛弘二年十一月□九日

從五位上行博士清原真人広澄

《6》寛弘三年正月二十二日海善澄勘文(明經勘文)

勘申

坐内侍所神鏡事

右、大外記滋野朝臣善言仰云、左大臣宣、奉勅、坐内侍所神鏡燒損改鑄如何。經籍之文、若可相准之有所見乎。宜勸申者。先非知彼深頭何敢求其比類。仍仰尋本朝之旧史、伏深經伝之遺文。

一奉始作并坐於御殿内及別殿祭之安置於阿国神宮事

謹檢日本書紀、天照大神、居于天石窟、閉其磐戸。于時、諸神憂之、

乃使鏡作部遠祖天糠戸者造鏡。於是、日神方開磐戸而出焉。是時、以

鏡入其石窟者、觸戸小瑕。其瑕於今猶存。此即伊勢崇祕之大神也。

〔事紀曰、天照大神、閉天石窟、刺許母理坐也。爾高天原皆暗、

葦原中津国悉闇。因此而、常世往。〕□□□□百有神、於安河之河原神

集々而、高御産日神之子、思金神令思而、取天安河之河上之天堅石、

取天金山之鉄而、求鍛人天津麻羅而、科石古理渡壳命、令作鏡。

右奉作之本縁也。謹檢先代旧事本紀、此鏡二面也。一者日前神、

一者天照大神也。或説云、取白銅。而此記謂取堅石并鉄者。案唐

家黃白術、以鉄・石有變金銀等之術咒、天山異俗境神人遇術士。取

彼鉄・石而作鏡、於理無妨。或説云、以銅作鏡、日神開天磐戸之

時、映其光明照耀天地、悉阿加之。故謂之赤金也。今案之、阿賀之

謂晴明也。非謂丹赤矣。是則、天照大神惟諸神俳優嚙樂而開天磐戸

之時、天地皆晴明也。故云、阿波礼。于時、当晴人面悉白。故云、

阿那於毛之呂。是明白之謂也。故以令倭□之終猶□此辭。

日本書紀曰、天照大神、手物^(案)鏡、授正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、而祝之曰、吾兒視此鏡、當猶^(報告)□□。可與同床共殿、以為齋鏡。

古事紀曰、日子番能邇々藝命^(遠)〔此天孫天彥々火瓊々杵尊也〕。天降之時、天照大神、副賜其袁岐斯八尺勾玉・鏡及草那藝劍。詔者、此者、專為我御魂而、如拜吾前、伊都岐奉。

右、神璽之起見於斯矣。但日本紀并此古事紀、共是太安萬侶之撰也。雖有小異、其旨既同。仍諸說之中、殊備之闕文。

日本史記略曰、天津日子命〔此亦同天孫尊也〕。天降之日、天照日神命天津日子命曰、吾子汝之天寿宝祚、及其子々孫々千々万々之制。吾在此天、々地永久、日月悠長、保之護之綏之福之。宜持賜以為變身之宝、便付八咫神鏡二面。故今案置木之神宮・伊勢神宮、最為國家鎮而崇祀、蓋有斯故歟。

同記略注云、紀云、其鏡本在天皇殿內、專自忌祭。至三間城天皇之代始、別殿祭之。神人語曰、茂土□□茂土加年呂美俱拜佐成天下之事者、謂此物歟。

右、神鏡二面、元者坐於御殿內、次別殿而祭之。今既鎮祭於紀伊・伊勢兩國神宮之由、明見此文。俱坐於御殿內之時号神璽、別殿祭之後申賀之許渡許呂者。旧說云、三間城天皇之代、畏其神勢、別祭之。畏字之說加之許。又所者是別殿之号。猶今謂內侍所也。故号畏所。兩國鎮祭之後、各依本号并国名称之。

檢日本紀⁽³¹⁾、崇神天皇六年己丑。先是、天照大神祭於天皇大殿之內。然畏其神勢、共住不安。故以、託豐鍬入姬命、祭笠縫邑。仍立磯堅城神籬。垂仁天皇廿五年壬辰、離於豐稻姬命、託于倭姬命。爰求鎮坐大神之處、而到伊勢國。時天照大神誨倭姬命曰、是神風伊世國、則常世之浪重浪帰國也。^(傍國可捨カ)□□□□國也。欲居是國。故隨大神教、其祠立於伊

勢國。因^(存齋宮于五十鈴川カ)□□□□上。是謂磯宮。則天照大神始自天降之處也。

右、謹依此等文案之、件神鏡者、昔開闢之始、諸神相共集議於天上而所奉作也。天孫降跡之時、天照大神持以授賜。其後崇祀御所保護皇祚、号之神璽。及于崇神天皇始、別殿祭之。^(謂脱)之畏所。至于垂

仁天皇、鎮祭於伊勢神宮。依本御号并依国名称之。爰三度移神居、三所存神体。神物之變易、以常理難推。旧史闕文、蓋有故歟。雖有委巷之說、既乖典策之意。案日本紀記曰、躋駁旧說、眩曜人看。即知官書之外、多穿鑿之輩。是以官禁而令焚。今猶遺漏遍在民間、多偽少真者也。然則改作之說、此焚書之遺漏耳。

一可件神鏡准大祖廟像事

右、神鏡陰陽不測、妙⁽³³⁾□□万之者也。尋……曾無此類。夫黃熊九牧之鼎、五運衰而^(懸解カ)□□。龍三尺之劍、而漢廢而非宝。況乎遠方照華之玉、近代伝国之璽、共無定主。何敢准此。若猶強求喻者、可謂太祖廟像也。何者、禮記曰、王者禘其祖之所自出。⁽³⁴⁾鄭玄云、禘大祭也。始祖感天神靈而生者也。我朝大祖則天祖天照大神也。称天者依為天神也。⁽³⁵⁾周礼王制曰、天子七廟三昭三穆与大祖之廟而七。鄭

玄祭法注云、廟之言貌也。今依此等文、件神鏡既是因造天照日神之象也。天祖復詔如視吾。又詔如拜吾者。尤可謂大祖之尊貌也。更无可疑之義矣。謹就老子經、尋彼終始之說、老子入西域之地、為浮屠之化。為報其母恩暫昇二禪天。爰胡王慕其化、造其像。後猶以彼像、為浮屠之廟矣。事亦相類。

一不可依本供奉改作事

右神鏡是日神。尊廟之由前条勘申既了。假令雖分折、非可損威靈。何者、案本朝紀⁽³⁷⁾、伊弉諾^(旁抜)□□劍斬軻遇^(旁抜)變智。……一段為雷神一段是為大山祇神。一段為高靈。是猛靈威神也。然則神物雖分、弥

以成靈矣。謹檢緯候之說云、日分成星。故其字從日生也。案周官并礼記等之說、紫微之中星、謂之皇天、大微之性星、謂之上帝。

其礼尊猶日、其祀嚴於日。然者、分而成尊嚴、還俗其始也。加以、

日神御体雖神、猶人也。手持宝鏡、豈只正円哉。但仰瞻如鏡者、其

光明照耀之遠望令然也。始奉作之時、偏以図彼遠望之体矣。其美者

望雖一理非一。礼記曰、天无二日。是謂其望也。春秋伝曰、天有

十日。是謂其数也。從甲至癸也。謹檢易參同契経并庄周雜記等、

河上姤女之芽焼而九練転以成靈、海畔漁者之亀分而七十鑽以猶神也。

然者、件神物雖焼雖分、更有何害乎。左氏伝曰、天□□如日月之

食、何有損於明。此類之謂也。老子曰、代大匠而斲者、必傷其手。

況此神物、誰敢代神物、而改作之者哉。亦縦至于相分、專可无其□

故者、天祖詔為我御魂。々有三魂、亦有七魄。若猶廟哉。彼遠之象

者更採他金鍔新鏡、殊厚其形空其内、研彼新質象外之清朗、籠此旧

体為内之精神。又両体御坐既経万古、日前御体更无消靈之理。若致

禱請之誠、必知所在之處。適若御坐同亦如是。

以前条事、大略如右。抑神明之事、非人慮之所及。機微之理、可決之

於卜筮。礼記祭義曰、昔者聖人建陰陽天地之情、立以為易、々抱龜

南面。雖有明知之心、無進斷其意焉。示不敢專以尊天也。況從古至今、

若大亦小日本神事、只随卜食者也。仍勘申如件。

寛弘三年正月廿二日正六位上行直講兼近江權大掾海宿祢善澄

《7》寛弘二年十二月二十日令宗允亮勘文（明法勘文）

勘申（坐内侍所神鏡焼損可改鑄哉事）

日本紀云、素戔鳴尊之為行也、其无狀。天照大神驚発慍、乃入于天

石窟、閉磐戸而幽居焉。故六合之内常闇、而不知昼夜之相代。于時、

八十万神、会於天安河辺、計其可禱之方。故中臣連遠祖天兒屋命、忌

部遠祖太玉命、掘天香山百箇真坂樹、而懸八咫鏡、（一云、真経津

鏡）相与致其祈禱焉。又猿女君遠祖天劍女命、則手持茅纒之稍、立

於天石窟戸之前、巧作俳優。是時、大神聞之而曰、吾比閉居石窟。謂

当豊葦原中国、必為長夜。示何。細開磐戸窺之。時手力雄神、則奉承

天照大神之手、引而奉出。一書曰、以石凝姥為治工、採天香山之金

作日第。又全剝真名鹿之皮、以作天羽韁。用此造之神、是則紀伊国所

生日前神也。一書曰、使鏡作法遠祖天糠戸者造鏡。時天兒屋命、以神

祝々之。於是、日神方開磐戸而出焉。是時、以鏡入其石窟者、触戸小

瑕。其瑕於今猶存。此即伊勢崇秘之大神也。大倭本紀曰、天照大神

欲招出奉。而以諸神祇等共論謀之、喚天子屋命・天太玉・天額戸主命

〔此鏡造之遠祖也〕。子石凝戸耳命三神等負須奉。時石瑕戸耳命、〔此

曰大神之孫也〕。此神取天安河之川上白石、而取天香山墮作大毗、閉

為白銅湯涌成吹作鑄真大鏡。〔此鏡小不合成之。所居城国名草社宮日

前国懸大神称号拝祭大神也〕。後更吹成湯涌祈禱真大鏡。〔此鏡美好成

合。是所居伊世国磯宮天照大神靈魂、天照大神崇敬拝祭大神也〕。一

書曰、天照大神以命天孫命名天津彦々火丹々杵尊、而欲命令知於葦原

中国事。依奉八咫鏡三面・玉鈴取持神禱曰、吾皇御孫命、以此物奉得、

而天降以安国閑食。奉二鏡者吾御魂靈為大神。之一鏡之鈴二物、吾御

孫命朝夕御食之食向治祭神、而幸安国所知之。自御勝間入治藏定、天

降未奉。一云、須沙農命以為繼世子名正哉吾勝狭勝々速日天神穗耳命

御子天津彦々女安火丹々杵命、以此神御子欲天降奉之。是時、神御祖

命授天御孫命奉物麻二耳、八咫鏡三面・子鈴一合四物。而〔云々如

上〕。天御孫命天降来。又云、物天降来神天王名天津彦々火丹々杵尊

之所持、而天降来天孫大神及国係大臣之御靈。此二大神、門所坐於日

向之襲高千穗宮奉。一云、笠狹御崎嚴敬祭也。同宮殿內嚴敬拜祭也。

〔此二大神靈實鏡之故、天孫大神者天照大神之靈也。伊勢磯宮所坐崇敬拜祭也。國係大臣者天照大神之前靈也。紀伊名草定所坐崇拜祭者也。〕一書云、天皇之始、天降來之時、共副護齋鏡三面・子鈴一合也。

〔一鏡者天照大神之御靈、名天懸大神。今伊勢國磯宮崇敬拜祭大神也。一鏡者天照大神之前御靈、名國懸大神。今紀伊國名草宮崇敬拜祭大神也。一鏡及子鏡者天□御食津神、朝夕食之向夜護日齋奉大神。今卷向穴師社宮所坐拜祭大神也。〕

〔古語拾遺云、至磯城瑞垣朝、漸畏神威、同前〔殿敷〕不安。故更令齋部氏、率石凝姥神裔、天目一神裔二氏、更鑄造劍、以為護身御靈。是今踐祚之日、所獻神靈鏡劍也。〕

〔神祇令云、踐祚之日、中臣奉天神之壽詞、忌以上神靈之鏡劍。〕

〔拋件等文、凡自天所下神鏡三面、本皆坐宮殿之中也。一面者伊勢國日大神之御靈、号之磯社。一面者紀伊國同大神之前靈、号之日前。〕

〔始從根本至于遷移、年載雖多書記已明。一面者只有下來之由不見。〕

〔治鑄并移坐之處、所謂天皇御食津神、朝夕御食之食向夜護日護齋奉大神。今卷向穴師社宮拜祭之者。〕

〔神祇式御坐之祭相加件神也。〕

又此神社在大膳職。爰知數處分祭祀寶鏡留宮殿也。

〔賊盜律云、盜毀佛像者、徒三年。菩薩減一等。疏云、化生・神王之類、若毀損、各令修復。說者云、化生造居華葉中小仏也。神王者天王并夜者也。詳文先為化生・神王也。仏菩薩亦同。拋檢此文、毀仏像雖設修復之法、燒損神鏡未見改鑄之文。況乎百練鍛冶之功、乃是万代崇敬之物也。且令著龜占筮吉凶、且致精誠禱請神祇、各隨其告可及其定歟。〕

〔右大外記滋野朝臣善言仰備、左大臣宣、奉勅、坐內侍所神鏡燒損改鑄如何。可相准之事、若有所見乎者。勘申如件。〕

寬弘二年十二月廿日 正五位下行左衛門權佐令宗朝臣允亮

《8》寬弘二年十二月二十六日美麻部直本・令宗允正勘文（明法勘文）

勘申 坐內侍所神鏡燒損可改鑄哉事

右大外記滋野朝臣善言仰備、左大臣宣、奉勅、坐內侍所神鏡燒損改鑄如何。可相准之事若有所見乎。宜勘申者。謹檢大倭本紀云、天照大神以命天御孫命名天津彥々火丹々杵尊、而欲令知於葦原中國事。依指奉八咫鏡三面・玉鈴取持神禱曰、吾皇御孫命、以此物奉得而天降。

奉二鏡者吾御魂靈為大神。之一鏡與之鈴二物、吾御孫命朝夕御食之食向治祭神而天降來奉。一云、須沙農命以為繼世子正哉吾勝狹勝々速日天押穗耳命御子天津彥々火丹々杵命、欲天降奉之。是時、神御祖命授天御孫命奉物麻二耳、八咫鏡三面・子鈴一合四物。而天降奉之。又云、初天降來神天王名天津彥々火丹々杵尊之所持、而天降來天孫大神及國係大神之御靈。此二大神、同宮殿內肅嚴敬拜祭也。一書曰、天皇之始天降來之時、共副護齋鏡三面・子鈴一合也。〔一鏡者天照大神。今伊勢國磯宮崇敬拜祭大神也。一鏡及子鈴者天皇御食津神、朝夕御食之食向夜護日護齋奉大神也。一鏡及子鈴者天皇御食津神、朝夕御食之食向夜護日護齋奉大神也。今卷向穴師神宮所坐拜祭大神也。〕

〔神祇式云、御巫祭神八座〔御食津神在此中〕大膳職坐神三坐。〔同神社在此中〕就此等文、先尋本緣、天御孫命初降來之昔、御祖命奉授三面之鏡、遷於殿內長以齋敬。厥後、一面者遷坐紀伊國名草宮。但今一面者天皇御食津神鏡。實雖坐宮者、隨時分立神社歟。抑依燒損改鑄如何者。賊盜律云、毀仏像者、徒三年。菩薩減一等。疏云、化生・神已之、若毀損者、各令修復。說者、化生者造居華葉中小仏也。神王者四天王并十二夜者也。注文先為化生・神王也。仏菩薩亦同。方今如來薩

〔天王〕

〔天王〕

〔天王〕

〔天王〕

搖之像・天王夜者之類為有毀損之時、製可修復之律、准量事情、大概相同。然而神鏡之為體、降自天津之後、伝我聖朝以來、尊崇之敬已久、靈異之名惟新。熟廻思慮、似難反觸。況乎先代旧事本紀云、令鑄造日第此鏡少不合。則紀伊国所坐日前神是也。復使図造日像之鏡。其狀美麗矣。而觸窟戸有小瑕。伊世国崇祕大神是也。彼美麗而有瑕莫非神魂。其形像之不合莫非神靈。當于此時何忘先驗損致拜祭。須无改鑄。仍勘申如件。

寬弘二年十二月廿六日從五位上守大判事兼行明法博士周防權守

美麻部宿祢直本

從五位上行勘解由次官兼明法博士土左權守

令宗朝臣允正

《9》寬弘三年三月十一日賀茂光榮勘文（陰陽勘文）

勘申 御坐内侍所神鏡燒損可鑄改哉否事

謹檢唐曆云、貞觀七年三月、直太史將仕郎李淳《淳歟》風鑄渾天黃

道儀奏之、置于凝暉閣。初淳風上言、今靈台候儀、是魏代遺範。觀其

制度、疎漏寔多。臣按虞書稱、舜在璿玑玉衡、以齊七政。則是古以

渾天儀考七曜之盈縮也。暨于周末、此器廻亡。漢孝武時、落下閎復造

渾儀、事多疎漏。故賈逵・張衡各有宮鑄、陸續・王蕃通加修補。渾儀

之闕、至今千余載矣。太宗異其說、因令造之。

今案、璿玑玉衡、是舜時之器。後代屢以鑄造渾儀者天象也。神鏡者

日象也。推其大概、略可相准歟。然而神鏡之起、在于神代云々。物

已靈造、非人功之所及。須祈禱神明、以俟示現。抑鏡是金也。今為

火所燒損也。剋賊之變、余殃可攘。所以然者、御本令庚辰于庚金也。

納音又是金也。今火弥之國家尤可慎御。延曆廿三年八月、暴風大雨、

中院西樓死牛。天皇生年在丑。歎曰、朕不利歟。聖言不錯載在史冊。⁽⁵³⁾牛是丑方正会土之獸也。樓榭是木倒殺牛、於五行相剋、其凶尤甚。以其異不慮也。今金火之變、与牛禍相同矧乎。鏡也神也、變異弥重。早被祈禱神明、兼行攘法、殃禍自鎮、福祚延長矣。

右大外記滋野朝臣善言仰備、左大臣宣、奉 勅、坐内侍所神鏡燒損改鑄如何。若有可相准宜勘申者。今依 宣旨、勘申如件。

寬弘三年三月十一日從四位下行大炊頭兼伊勢權介賀茂朝臣光榮

《10》寬弘三年四月日秦政國勘文（陰陽勘文）

勘申

座内侍所神鏡燒損可改鑄哉事

謹檢陰陽書等、可相准件事之文、未有所見矣。准有叙化育之終始、割鬼神之昏明、知吉凶之影像、彰成敗之徵驗之文。但天地瑞祥志曰、⁽⁵⁴⁾

鏡無故自破、細作憂死。鼎官有口舌云去。拋件文案之、為火燒損、雖

非無故、以絳數度無有其損。今度已損、咎徵可重歟。抑重案旧典、昔

西域遮迦越之殺牛祠祀、金輪去不歸。晋惠帝之時、武庫火宝劍飛入東

海。今神鏡雖損、遺体猶存。料知国運未尽、皇祚有殘矣。又案日本

紀、神鏡之起遠在神靈之工、不可以人力輒加鍛冶之功哉。且祈請神

明、且可被卜筮吉凶歟。

右大外記滋野朝臣善言仰備、左大臣宣、奉 勅、坐内侍所神鏡燒損改

鑄如何。可相准事若有所見乎者。勘申如件。

寬弘三年四月 日 陰陽頭兼權陰陽博士政國

《11》寬弘三年月日惟宗文高・安倍吉平勘文（陰陽勘文）

勘申神鏡事

大外記滋野朝臣善言仰備、左大臣宣、奉勅、坐内侍所神鏡燒損鑄改云何。若有可准之事乎。勘申者。

謹檢蕭吉金海軍術篇曰、黃帝出軍伐蚩尤。未剋慘然乃睡。西王母被玄狐之裘、以符授之曰、太一在前、天一在後。得土勝信、戰即剋矣。黃帝寤思其符、召風后・力牧、告之以夢。風后・力牧曰、此天応也。戰必自勝。黃帝乃与力牧、俱致壇於河祭、以天宰玄龜術符、從水中出巨煙中。而去黃帝再拜受符省之、乃所夢得符也。黃帝備之以征、即会蚩尤。河圖曰、黃帝征蚩尤弗剋。仰天而嚶。天使玄女下、授帝兵信符、帝佩之刻蚩尤。又黃帝出兵刃付王者、以威亡治割兵賊戟矣。

今案之、秘術書云、兵刃二也。一日月護身之劍也。疾病邪氣置之皆愈。^(秘)一三公戰鬪之劍也。凶賊敵兵帶之自伏也。今謂其兵刃宜陽殿靈劍是也。件靈劍昔神功皇后之時、自百濟國所獻也。日神之符如說皇后以為宝。自余以降伝来四十九代、歷數七百余歲也。所謂相伝累葉神物、靈驗尤甚者也。而去天德四年之秋、悉以燒損。即同五年之春、如元鑄之。⁵⁶今謂件神鏡、案日本書紀等、天照日神之物有二鏡。

〔二紀伊之日前、一伊世之大神。〕後□日神持宝鏡、授於正哉吾勝々速日天忍穗耳尊。而曰、視此鏡猶視吾、可同牀共殿、以為齋鏡者。神鏡是今之賢所乎。亦以件神鏡為天照日神之体。其日神之義巨計。夫以日是火也。火是太一也。或經曰、太一之氣之本万物精關開之始、天皇之像亦天之靈也。五行大義曰、太一事万神之因五帝之尊祖也者。日神之心尤為日本之天、天祖王者之先靈者也。而去年之冬燒損、咎徵蓋恐懼。但尋其可改之証、未有所見矣。今件靈劍若可准之哉。彼宗景三舍之度、祈而成天威超□八百之祈祭而得神助、且祈請伊世之神宮、且令合神祇之下食、随神卜之告將転其余孽矣。

寬弘三年 月 日從五位上行權陰陽博士惟宗朝臣〔文高〕

從五位上行主計權助兼陰陽博士丹波介安倍朝臣〔吉平〕

◎表題2

神鏡燒損可奉鑄改否事〔寬弘二年〕

陣定文〔寬弘三年二月〕

左大臣〔御堂〕 内大臣〔公季〕 儀同三司 右大將〔実一〕

左衛門督〔公任〕 彈正尹〔時光〕 權中納言〔俊賢・隆家〕 左

大弁〔行成〕 勘解由長官〔有国〕等卿也

内侍所神鏡可奉納新造韓櫃間雜事 永曆元年二月

外記〔師元〕勘文

右大將被申沙汰

《12》寬弘三年七月三日御前定定文

諸道博士等勘申神鏡事彼此不同依何可行之哉

《御堂》左大臣・左衛門督藤原朝臣《公任》等定申云、諸道勘文彼此縱橫也。各所准申不相允歟。但《多》所申者、可成祈禱依龜兆之旨也。今件神鏡雖燒損、猶奉崇遺体靈驗不可空歟。為当奉改鑄本体可合於神意歟。大都神意之趣人間難決。然則祈之神明、問之下筮、相待其告可被定行歟。抑神鏡本体非一。或又人代奉鑄此像之起、慥無所見。崇敬之間頗以不審。況若及改鑄者、非知本緣可難左右歟。而一兩勘文之中、有略所勘申事趣不同、又難一決。重尋問之各可令申詳旨歟。

《公季》内大臣定申云、神鏡事去年定申依諸道勘申可被行之由。而件勘狀等不申一定、猶不可被改鑄歟。

《儀同三司》前大宰權帥藤原朝臣定申云、諸道勘申神鏡事、以本朝之

書紀勘申之、道々其趣不詳。如海善澄之勘申、初同御座、次移別殿。

仍每其所奉留此体者、理雖可似、已無慥文。如允亮朝臣之勘申、神鏡三面已是天降者。若依此文、又違日本紀之說也。何況就漢家之經典《伝》、准申之。道々尤難可相当。而至于明經博士広澄所申、尋崇神天皇御世例、早可奉改鑄之旨、專不可然。何以末代之人力、輒動万古之神物乎。但神意不図。先任道々遍申可被致祈禱。然後若可奉鑄之告有神宣灼然者、其時左右之。若無慥告者、只崇此体可奉尊重歟。

《実資》右大将藤原朝臣・《時光》彈正尹藤原朝臣・《俊賢歟》權中納言藤原朝臣・《行成》左大弁藤原朝臣等定申云、諸道博士等勘申神鏡事、博士等洽聞其道博道其義、極九流之淵源、詳百家之子細者也。任彼勘狀可決一揆。而或引唐家之典籍、或摠当朝之書記、論其鏡劍、准彼璽鼎。然而因准無謂、證驗不切。未知孰由得其是非。此中明法博士等勘申坐伊世・紀伊兩国神宮之本体各有所見。頗可比量歟。件神鏡者、昔雖鑄冶靈効猶新、今雖燒損神体既存。推神体之所遺、知靈効之不空。仍更不奉改鑄、須專被斎敬。然則、朝家之龜鏡弥明、聖君之福祚将久歟。

《隆家忠輔之間也。可尋之。》權中納言藤原朝臣定申云、神鏡之事道々勘申旨各以相分。善惡難申、准的難量。就中新鑄之事、不知如何。事依神明□可被安置本鏡歟。

《有国》勘解由長官藤原朝臣定申云、諸道勘文云、□似可改鑄。其所引証文云、秦始皇以藍田玉刻造玉璽。漢代相伝以為永宝者。始皇者是莊襄王之子。二世而亡天下、玉璽又為賊奪失、秦祚永絶。奉於神鏡者鑄造之処也。天賁下之者神也。神代以來伝至今、敢無遺失累代之天日嗣也。昔唐帝曰、日本天子以日為兄以月為姉。故称天・最可尊貴。以之知之、非可以秦皇所造之璽相比此神鏡矣。抑此神鏡雖在灰燼、以

頗有瑕僅。然円規無虧以形体已全。而奉始主上、至于臣下、恐神鏡之乖常、歎靈姿之非例。所疑者、若是及天祚之末、少神靈之効歟。化勤之間、神光照屋如迎日月、忽呈靈異、可謂表皇綱之長久也。加以明法道勘文、天降三鏡之中、其一在紀伊国、謂之國懸、頗有不麗者。神代之物猶有如此鏡。是照形之宝也。火事之後神光更照章、非宝鏡之有靈神哉。弥致如在之礼、殊奉崇敬可期万代之皇基也。

奉安置本体并祈禱改鑄否事、諸卿所申各異。依何可行哉。

左大臣重申云、神慮難測者、可祈請之。人事巨定者、可卜筮之。隨其所告可被行之由定申先了。抑有可改之告、若奉鑄之者、所遺之金不可点棄。更混新金可有其憚。若新旧之相混別可奉鑄其体者、以彼旧金可移何処乎。依輒難定其所欲奉安置一処者。亦天無二日、土無二主。唯一畏所之中、何有同体之相並哉。

内大臣已下定申旨如初。

寛弘三年七月三日

《13》寛弘二年十二月十日宸筆告文

天皇^{於良末東}御詔^{掛家畏支}伊勢度会乃五十鈴乃河上乃下都磐根^尔大宮柱広敷立^天高天乃原^仁千木高知^天稱^編辭^へ奉定^{礼留}天照坐^須皇太神^尔恐^{見畏}畏^{見畏}哀^申給^ハ、去月十五日^{乃夜不計}而外^二内裏燒亡之間^仁神代^乃宝^東之^{伝給}留^爾鏡、其規涌破^天其体不分明^須。是故^二歎^キ憂^給布留^{古東}、寤寐^尔不怠^難之。日月空^く邁^天為^む所^遠不知。此^尔因念^給不^可波、天皇^天乃日繼^尔奉^{古東}已^尔二十年^仁及^ぬ。薄德^乃身^遠以^天久^九社稷^遠守^留皇太神^能厚^{御願}廣^{御助}。而^遠天^尔稟^{性素}愚^尔天^国興^之民^遠安^須政^留闕^多留^{古東}慙^懼給^{布留}問^仁頻^能年如此火媛^度尔^及ぬ。就^中此度、永代^乃御護^と在^須神鏡其体已不全。抑^天德年中^尔火災時、神鏡雖在灰燼中靈驗最^{毛威}尔^天專^ラ不涌破^遠、此

時_ル燒損_{世リ}。神明能威波、古_今毛_新奈留_遠、是度之_哀那曾此微有_ム。若世乃
運_加若身乃_各世乃_運奈_ら者、太神猶在那子其告_遠不蒙。身_能答_奈ら_□一身古曾
殃_仁毛_当ル_{ケム}。何_曾万代乃_護遠_失む。而_遠忽然_ル此懼有_ル因_天身_遠勞_之心_遠小_女天
此旨_遠令_祈申_須留_間尔_昨乃_申時_遠以_天自然_乃光_忽斎_鏡能_韓櫃_尔映_世留_遠聞_給天、
弥_与且_波畏_里且_波喜_給布_留古_東極_リ無_之。皇太神縱世_運尔_未礼_縱身_答尔_未礼_必神威_遠
垂_天告_示給_は、事_将来_遠慎_見身_の罪_過毛_補波_む。又_本能_体遠_偏尔_可尊_敬加
他_能銅_遠以_天可_鑄加、本_神異_以天_里人_事尔_波無_計。故_是以_以沢_定吉日_良辰、
參議正三位行兵部卿兼左大弁侍從美作權守藤原朝臣行成_遠使_尔差_天出
奉_里給_布。皇太神此状_遠聞_食收_給天_縱世_澆季_仁及、人_誠信_薄之_天致_世里_毛昔
太神乃_天降_坐之_々時_与天_皇遠_護幸_へ給_ヘ古_東其_心明_奈リ。今_{国家}大_事斯_与里
過_ハ無_之。何_尔因_天加_靈驗_遠垂_給古_東無_む。又_此神_鏡太_神尔_像リ奉_礼留_古止_遠伝
聞_給天_殊仁_折申_留所_奈リ。身_乃為_百王_乃為_仁必_告示_給て、近_当時_憂息_め遠_波
後_代能_謗遠_塞天_{朝廷}能_政遠_毛初_終快_之天_君臣_合体_尔人_民業_遠榮_ホ、重_可未_災
禍_遠毛_未萌_尔弘_退給_天天_皇朝廷_遠常_盤堅_磐尔_夜守_日守_仁護_幸給_ヘ東_美恐_み毛_申。
神
寬弘二年十二月十日
神《宸敷》筆云々。

《14》寬弘二年十二月十日告文

天皇我_詔旨_度掛_畏支_伊勢_乃度_會乃_{五十}鈴_之河_上能_下都_磐根_尔大_宮柱_広敷_立高
天_原尔_千木_高知_天称_辞竟_奉天_天照_坐皇_太神_乃乃_広前_仁恐_見恐_申賜_波久_止申_之。
神_鏡者_自往_代与_利御_身乃_護と_天奉_崇リ来_已止_久之。而_去月_{十五}日_夜、内
裏_燒亡_之間_尔円_規已_損多_リ。度_々乃_火災_尔者_或炎_中尔_有止_毛鏑_範不_破寸、或
亦_依人_之取_出天_形鑑_猶明_リ。今_為此_度天_忽破_損たり。若_是世_之澆_薄之_尔天_礼者_加。
朕_以不_德天_久忝_皇位_世リ。改_不得_其中_寸、人_不称_其德_佐留_加所_被也。雖_然
累_代之_神物_奈リ。已_有其_靈リ。何_及朕_代天_此損_破成_せる_止、憂_歎大_坐已_止、

夜_毛昼_毛無_間久_無限_之。爰_漸廻_觀慮_天尋_訪往_昔者、皇_大神_尔相_像とし_天所_奉
鑄_奈リ。因_茲、禁_中尔_近奉_崇こと無_極之。今_已不_全寸。若_猶本_金奈_ら可_奉
崇_敷。將_新奉_鑄天_其可_奉崇_敷。人_事難_決之。皇_太神_殊垂_冥助_天告_示給_ヘ。
又_大刀_毛万_代之_財奈_リ。玉_飾同_損仁_太リ。件_災尔_依天_玉体_可慎_給久_止毛_皇太_神乃_厚
願_広驗_尔依_天奉_護助_給ヘ。若_天火_奈ラ_波其_微遠_晴弘_退給_{。人}火_奈ラ_波其_由
顯_示給_{とし}天_奈毛。故_是以_以沢_定吉日_良辰、參議正三位行兵部卿兼左大弁
侍從美作權守藤原朝臣行成・王伊勢權守從五位下致孝王・中臣神祇權
少副正六位上大中臣朝臣守孝等_遠差_使天、忌_部散_位從_{五位}下_齋部_宿禰
守_親加_弱肩_尔大_櫛取_懸天_礼代_乃大_幣遠_持斎_波リ令_捧持_天奉_出給_布。此_状遠_皇
太_神平_久聞_食給_天、答_徵長_消衣_厄難_晴弘_退給_ヘ天_天皇_{朝廷}遠_宝位_無動_久常_磐
堅_磐尔_夜守_日守_仁護_幸給_ヒ華_夏晏_然尔_人民_視樂_尔之_天万_代之_宝國_長伝_保
給_ヘと恐_見恐_見も申_賜は_久と申。

辭_別天_申賜_は久、昨_夕奉_遷此_神鏡_留間_尔忽_有光_輝天_照耀_世リ。因_茲、感_其神
靈_之猶_存之_給天、此_皇太_神乃_乃御_助護_自在_奈リ止_欲給_布已_止有_リ。此_状遠_平久_聞
食_之弥_添靈_盛天_宝位_遠長_久尔_護幸_給ヘと恐_見恐_見毛_申賜_波久_と申。

大内記宣義作之
上卿閑院太相国

《15》永曆元年二月十三日中原師元勳文（外記勳文）

永曆元年外記（師元）勳文
勸_申坐_内侍_所神_鏡可_奉納_新造_韓櫃_間雜_事例_事
天_德四_年九_月廿_三日_庚申、亥_三点_内裏_燒亡。
廿_四日_辛酉、從_今日_三ケ_日諸_司靡_務。昨_夜鏡_三（加_之已_所）并_大刀_契
不_能取_出。今_日勸_令搜_求之_处、余_燼之_上、已_得其_実。但_件神_物調_度燒
損。其_実猶_存、形_質不_変。甚_為神_異。即_召大_藏省_韓櫃_令納_之。

十月三日己巳、今日縫殿大允藤原文紀參向申云、去九月廿四日依旨、御坐於內裏加志胡所三所、令遷幸於縫殿寮者。其間日記如此。

天德四年九月廿三日內裏燒亡。藏人頭右兵衛督源朝臣延光、召縫殿大允藤文紀、仰云、有勅自內裏燒亡之所、勅使人等所求出威所神御鏡・神宝并大刀契等、奉納寮高殿。文紀預護全宿直、隨後仰、可造立切懸・部戸等之由仰修理職。同日職官人到来、高殿中二間造立切懸・部戸□□。即日奉納威所三所。一所鏡、件御鏡雖有猛火上、而不涌損。即云伊世御神云々。一所魚形、無破損。長六寸許。一所鏡。已涌亂破損。紀伊國御神云々。大刀卅八柄自清涼殿求出、卅四柄自溫明殿求出。此中有節刀。又有金銀涌亂一斗余許。契七十四枚。八枚金。十四枚銀。五十二枚銀塗物□□形也。自背中別兩、各有銘。併全不損、長二寸余許。已上九月廿四日納。勅使左近少將源伊陟・將監藤佐理・藏人右近少將藤助信・將監源時中・藏人主殿助藤為光・藏人所出納雀部有方・女官紀姬子・掃部女□□全子・小長谷德子。十方拝御調度一具。皆涌損瑕々。鑲二具・韓鉤六柄。已上九月廿五日納。勅使左近少將源伊陟・右近權少將藤清遠・出納雀部有方。韓鉤一柄・鑲鎰一柄。金塗物。銅涌亂一丸・金銀一裹。已上十月三日納。勅使右近權少將藤清遠・出納有方・女官姬子・金子。銀銅一裹。銀似物蓋二枚。銅印涌一面。已上十月五日納。勅使・女官同上。右威所・大刀契・十方拝御調度・金銀等、依旨、勅使共預納高殿。大允藤文紀・少屬大石忠利・左近番長一人・舍人一人、相共每夜宿直。至于夜晚、以藏人所出納・小舍人、令臨檢宿直人勤否。十月十八日卯時、藏人主殿助藤為光・女史紀姬子等到着、仰文紀、於金銀一裹・十方拝御調度等、進御所職御曹司、經御覽造定作十一裹、如初返納高殿。又同日午刻、勅使藏人藤永保・女官姬子・全子等到着。以赤色錦令裁縫

袈・御鏡緒等、覆裹威所、奉納內匠寮所進赤漆韓櫃二合、以同色錦各縫立也。一合奉納威所御鏡。一合奉納魚形并涌鏡。即召內膳司官人、令進御菜・上分雜魚。召藏人所錢一貫文、賜女官姬子・全子等令交易酒、俾祭祀威所、如先奉納了。又以十一月七日、勅使藏人右近少將藤助信・女史紀姬子等到來。奉威所御韓櫃二合・大刀契御韓櫃一合、即召左右近衛府官人一人・舍人十人・左右衛士各三人列陣御櫛。勅使助信・本寮官人文紀・忠利、共奉遷於冷泉院內侍所了。同月廿七日、召本寮大允文紀・少屬忠利等賜勅祿。文紀黃色襖子。忠利疋絹。十一月一日丁酉、有伊勢太神宮・八幡・賀茂・平野・松尾・石上并六社奉幣事。被申內裏燒亡并神鏡・大刀契事等也。廿三日己未、今日被立柏原・後山階兩陵使。大納言在衡卿催行之。柏原使參議藤原朝忠朝臣、後山階使參議同元名朝臣等也。被申內裏燒亡由并神鏡・大刀契等事。

十二月五日庚午、大納言藤原在衡卿參着左仗座參。被立五畿七道奉幣使。被申內裏火事并神鏡・大刀等事也。

此外或御記云、天德四年十月一日、令延光朝臣左大臣、奏式部少錄秦敦光申坐內侍所大神本緣事。又令延光朝臣仰左大臣、始作納神鏡韓櫃日時事。又何可定飾作大刀具事。左大臣令奏陰陽寮挾申始作齋鏡御韓櫃日時文。始作今月五日午二点、奉納七日巳二点。又挾申可被始作大刀契御韓櫃。并奉納日時文。始作今月五日廿八日、奉納十一月七日。令仰大刀契等各可候行幸。須令挾申移徙冷泉院以前日、自余依挾申日可行。七日、令延光朝臣仰民部卿藤原朝臣、內侍所印已燒亡、宜新鑄作。廿八日甲午、召鍛冶工・內藏屬道実行等、於侍所前令造大刀室幄等。金銅飾色今度不待造具、以後日可裝。仍今日只人室幄等。納櫃中、內匠寮工作赤漆櫃、居

黑漆莚形、加同枋一枝・両面覆・緋綱二条。其尺寸無慥知者。召開彼此見者、推量令造也。以金銀銅等魚形契符各八袋、同加納此櫃中。〔縹袋。以金銀泥各深色。〕内匠寮又以此日鑄内侍司印。十一月九日、令仰左大臣早可令勘申可始作焼損節刀日時事。十二月十二日丁丑、未刻於内侍所納大刀、於此院庁町直廬令琢磨。応和元年六月廿八日庚申、此日於神護寺、令天文博士保憲修五方五帝祭。為治鑄焼損節刀之中靈劍二柄也。八月七日、於内侍所北廊加作大刀室飾。十一月十四日、此夜以大刀櫃鎖匙、納璽御劍緒中。

寛平御日記云、掌侍春澄洽子申云、大刀匙在件御劍緒中者。而年来無件辛櫃鎖、唯以繩結。焼亡之後、令新造尋旧事所納也。又納同櫃魚符契等、以今日隨其銘改入三囊。

寛弘二年十一月十五日己未、子刻内裏焼亡。

十六日庚申、諸司廢務。仍無政。大臣以下參入。左近少將藤原朝臣重尹・右近權少將源濟政奉・宣旨、女官等引具奉求賢所。而間炭灰之中悉焼損、御鏡二面令沸合、纔三四寸許殘坐。魚形無損。

十八日壬戌、左大臣召諸道博士等仰云、賢所為焼亡被焼涌。若新可奉鑄歟、若乍如是可奉持歟、并始出給由緒等、宜勘申者。大外記滋野朝臣善言・式部大輔大江匡衡朝臣・文章博士大江朝臣以言・明經博士清原真人広澄・直講海善澄・左衛門權佐令宗朝臣允亮・大判事美麻部朝臣直節・陰陽權頭秦宿禰政邦等也。

十二月九日癸未、右大臣・參議藤原有国卿參着八省院座、被立臨時七社奉幣使。被申内裏焼亡并神鏡・大刀等事也。

今日自官司賢所被奉渡東三条院。參議源經房朝臣率諸陣并如〔女歟〕官等、任例供奉。

長久元年九月十日壬戌、今夜子刻皇居上東門院焼亡。藏人頭左近衛中

將藤原資房朝臣、率女官等奉求賢所。煨燼之中、何明焼殘。関白左大臣以下諸卿、自御所率婦奉迎賢所、更參御所奉崇之。少納言橘義清・權少外記惟宗国重等、率使部・吉上等、尋求御印鑑鈴等煙火之中、搜得且納辛櫃二合運御所了。不知其殘之有無。依無短籍目録也。十二日甲子、左大臣以下參入、被定申日時等。陰陽權助安倍時親等扨申之。可造御印辛櫃事、〔今月十八日庚申二点。〕可納請印事〔同廿八日已二点。〕可造賢所御辛櫃事、〔今月十五日丁卯已二点。〕可奉入事、〔同廿八日申二点。〕大祓〔今月十九日午二点若申。〕廿七日、被立伊世公卿勅使。參議藤原賴卿為使、被申豐受宮正殿・東西宝殿為大風顛倒事并内裏焼亡事也。神鏡事被載辭別。今日又被立諸社幣使。皇居火事之由也。此外春宮權大夫資房卿〔于時藏人頭。〕記云、長久元年九月廿八日庚辰、今日神鏡奉入新造辛櫃。〔刻限亥二点。先日奏了。〕至于来月二日、僧侶并年輕服人不可參入云々。即令仰知。是自今日可有御神樂之内、伊世使来月二日可參着之故也。是仰事也。臨昏黑參内。即向東对。為見案内也。〔賢所在此对。〕先是、權左中弁義忠朝臣參入。昇神鏡御辛櫃、〔新造、加台并床等。〕相如可奉入之莚〔平文。〕并御衾綱等。見其樣異初体、寸法皆相違。初樣似厨子。長四尺許、高三尺許、広一尺五六寸許、台間床等黑漆也。又二重床等白木也。而御辛櫃不似厨子、細高之辛櫃也。其足平文。又第一之床黑漆、次台赤漆也。御辛櫃同赤漆也。〔朱砂上少許用漆云々。〕金銅金物并庄嚴、太以華麗也。事々似今案。參御前奏御辛櫃事。仰云、義忠申加今案之由、奇恠事也。小時関白被向東对見御辛櫃。命云、頗雖非古体、甚以華麗也。何事有哉。伊勢大神宮昔無金物并木尻云々。今皆用之、如然之心也。及刻限主上渡御。藏人定房〔五位。〕・公基・信房・義綱等執脂燭供奉。予依関白命候御下襲尻。関白在御後。紀〔他歟〕侍臣不可候由関白被命也。

仍只職事供奉。不候御劍。依閑白命。若依謙下之心歟。即入御々在所。閑白被命云、汝并可供奉女官等、《不可過一兩》。相共參入可奉遷入。汝可執脂燭。先例《一条院御時》。近衛司二人供奉。至此度者、汝一人可候。依有多見之憚也。予取脂燭、近參進、令掃部女官有子《年七十余古老者也。又先例女官奉裏、不用內侍等》。一人令供此事也。但博士命婦一人又候之。其故者件有子依有老毫之氣也。閑白在簾外。行事先令博士命婦并有子等、《又關門守惠子頗近候。依古老之者也》。解御辛櫃綱等。《本自奉入之御辛櫃也》。即開其蓋。先是、以清薦等皆敷御前。奉取出御体、《入折櫃》。博士捧之。此間令之女官二人《有子・惠子》。撤去本御辛櫃薦等、敷滿其跡、《本薦令撤去了》。令安置台并床等。《台上敷纏綢端一枚、其上立床、俟台床同様也》。以有子取新造御宮《暫在御辛櫃上》。令置薦。《開蓋》。又以御体奉入之折櫃、同安置其傍。《博士供此事》。即奉取出御体、《博士并有子供奉之。自余女官皆令退出了。此間典侍芳子參進云、先例典侍・掌侍等供此事。女官等專所不知也。閑白命云、先例專不然事也。內侍只候之名也。近不候。女官独供此事。即令芳子退出了》。奉遷入綿中。《內藏寮令進、官方所行之》。御体頗分析數多御也。推裏又其上以絹裏、《不結其上也。件絹本奉入之絹也》。奉入新造御宮、覆其蓋、以緋細綱十文字奉結了。似《以》件衾《件御衾長四尺第四幅也。以白絹入錦。內藏寮所進。以縫殿寮【不見】史令縫》。奉裏御宮。《不慎其上。只推裏也》。開新造御辛櫃、《先是、又昇立御薦上》。奉入了覆其蓋閉鎖了。似《以》鑑同結付其鎖了。即供覆錦、《淺黃色兩面之錦。色先例紫色也》。以緋綱融間床奉結御辛櫃、《非十文字面有二結也。此間上臈女官一兩令召供之》。安置床上。《女官昇之》。典侍芳子云、西向可奉安置。為向御在所也。閑白命云、在溫明殿之時、北向安置云々。不向御在所、只用便宜也。

仍安置南向了。御拜了還御。即令女官等下格子。有御神樂事。內膳司供賢御饌。閑白密々來臨給。小時退出。主上乍着御昼御裝束、御南面簀子敷。《寢殿》。女房等祇候。依御信心之懇切歟。寅初神樂了。主上入御。《御樂神間、主上以予被仰內侍所云、御祈能可令勤仕。又以女官等可舞也。件事雖非指法、一条院御時、鏡燒損給之時、進內侍祇候彼所。似《似》女官等令舞。又以宿直近衛等假令神樂。其夜神光昭屋。爰知神驗猶存。令習彼例。思此事頗有靈驗也》。廿九日辛巳、今日国忌。仍言御神樂。自明日二箇日可被行之由被相定了。右文籍所注如件。仍勤申。

永曆元年二月十三日 掃部頭兼大外記中原朝臣師元勤申

《16》永曆元年四月十一日二条天皇綸旨

內侍所神鏡可奉入新造御辛櫃間事、外記勘文內条々不審注別紙遣之。早可令計申給者。依天氣上啓如件。

四月十一日

右大弁資長奉

進上 右大將殿

一 御辛櫃寸法事

天德

召大藏省辛櫃令納之。

寬弘 長久 《已上不明明》

一 覆錦事

天德《赤色》。寬弘《不分明》。長久《淺黃色兩面錦。先例紫色》。

一 平文御莒事

方円并寸法無所見。

一金物事

長久被用金物了。遂彼年例、可有沙汰歟。

一當時御辛櫃事

奉納新造之後、何様可被安置事。

一奉納間次第事

就何年例可被准行乎。

一伊勢・八幡重可有奉幣否事。

去二月被勘奉幣日時了。而依穢奉延引。其由可被申歟。

一可被告申山陵否事

一可有廢朝否事

《17》永曆元年四月十二日二条天皇綸旨

内侍所神鏡奉入新造御辛櫃之由、五月節以前、来十七日之外日次不候。

仍彼日必可奉入候。而彼条々不審未被一決之間、御物具等、件日以前

難調出候。人々皆被申候了。付此御使今日中必可令申御之由、内々

御気色候也。仍上啓如件。

四月十二日

右大弁資長奉

進上 右大將殿

《18》永曆元年四月十三日德大寺公能請文

内侍所神鏡可被奉納新造御辛櫃間条々事

一御辛櫃寸法事

天徳召大藏省之由雖見勘文、於寸法者不詳。然者只就長久資房卿記、

可被計行歟。更不可具議。且是為吉例之故也。

一覆錦事

天徳〔赤色〕・長久〔淺黃色〕、二代共以吉例也。但神宝類多用赤地歟。

一平文御莒事

方円寸法雖不見勘文、就長久例、且相計其具、可被定寸法歟。

一金物事

長久頗雖非古体、甚以華麗也。引大神宮例無改定被奉納了。今度又不可有左右。只可被追長久例歟。

一當時奉納御辛櫃事

奉納新造辛櫃之後、旧辛櫃可遣神祇官歟。是則長久度令燒落之土類、有僉議被安置彼官云々。其儀雖不叶今度可被准捫歟。兼又祭器幣則埋云々。可被相計歟。

一奉納間次第事

天徳・寛弘例、外記勘文不詳、其理可然。長久資房卿記已以分明也。尚不詳事、可被折中彼記之意歟。

一伊勢已下重可有奉幣否事

去二月誤度々例被申伊世一社云々。隨又依天下穢、于今遲引之上、希代之重事也。尚可被申廿二社歟。自昔至今無如此之事故也。尤可

被祈申諸社已下歟。

一可被告申山陵否事

如天徳例、勿論可被告申歟。為希代事之故也。

一可有廢朝否事

代々宗廟神社有事之時、被行廢朝。何況今度儀、殊可被驚之事歟。

右条々思慮之所存、大略如此。抑今度事、依禁中穢、于今無其沙汰尤不便。尚引勘天徳・寛弘・長久間日記等、能可被計行歟。又長久

不被忌九月歟。重軽差別可被問陰陽寮歟。且以此旨可被洩奏達之状如件。

四月十三日 右大将

校訂註

- (1) 『日本書紀』神代下・第九段一書第二。
- (2) 『日本書紀』神代下・第九段一書第一。
- (3) 『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年六月丁巳条。
- (4) 『明文抄』卷一・帝道部上に「匡房卿記」として引用されているものと同内容。
- (5) 『後漢書』卷一上・光武帝紀一上、「蔡邕独断曰」。後に引用されている「玉璽譜」も同注内に引用されている。
- (6) 『唐六典』卷八・符宝郎条とほぼ同文。後に引用されている「玉璽記」も同『唐六典』内に所引。
- (7) 『晋書』卷二十五・志十五輿服
- (8) 以上、『墨子』耕柱篇か。
- (9) 『漢書』卷二十五上・郊祀志。
- (10) 『戦国策』卷一 東拾。
- (11) 『拾遺記』卷四。
- (12) 『拾遺記』卷二。
- (13) 『唐会要』卷十一・明堂制度に同様の記事がある。また、『通典』卷四十四・礼四沿革四吉礼三も参照。
- (14) 『文選』卷五十五・広絶交論に引く春秋孔録法に「有人叩金刀、握天鏡」とあり。
- (15) 『大戴礼記』卷六・武王踐祚に「鑑之銘曰、見爾前、慮爾後」と

ある。

- (16) 『太平御覧』卷八〇二・珍宝部一（珠上）に「孝経援神契曰」として同文あり。
- (17) 「神璽之鏡く号同実殊耳」は、『令集解』神祇令13踐祚条令釈と同文。
- (18) 『春秋左氏伝』宣公三年条。
- (19) 『冊府元龜』卷三十三・帝王部崇祭祀二にほぼ同文あり。『唐会要』卷九上・雜郊議も参照。
- (20) 『唐六典』卷八・符宝郎条に「徐令言玉璽記」として同文がある。『全唐文』卷一四九にも同文があるが、こちらは玉璽記を褚遂良撰とする。
- (21) 『唐六典』卷八・符宝郎条。
- (22) 『唐六典』卷十二・内侍省尚服局司宝条。
- (23) 『日本書紀』神武天皇即位前紀。
- (24) 以下『古語拾遺』。
- (25) 『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年九月戊辰条を基に作文か。
- (26) 『尚書』序。
- (27) 『日本書紀』神代上・第七段一書第二。
- (28) 『古事記』上卷。
- (29) 『日本書紀』神代下・第九段一書第二。
- (30) 『古事記』上卷。
- (31) 『日本書紀』崇神天皇六年条、垂仁天皇二十五年三月丙申条。
- (32) 『踏駁旧説』く「多偽少真者也」までは『日本書紀私記（甲本）』序の引用である。
- (33) 以下「廟像也」まで建武元年系本『年中行事秘抄』に「海善隆

勘文」として所引。山本昌治「校訂 年中行事秘抄（五）」（大阪青山短期大学研究紀要』一二、一九八五年）参照。

(34) 『礼記』第十五・喪服小記。

(35) 『礼記』第五・王制か。

(36) 『礼記』第二十三・祭法。

(37) 『日本書紀』神代上・第五段一書第七。

(38) 『礼記』第四十九・喪服因制。

(39) 『春秋左氏伝』昭公七年条。

(40) 『春秋左氏伝』宣公十二年条。

(41) 『老子』。

(42) 『礼記』第二十四・祭義。

(43) 『日本書紀』神代上・第七段本文。

(44) 『日本書紀』神代上・第七段一書第一・第二。

(45) 『古語拾遺』崇神天皇段。

(46) 養老神祇令13踐祚条。

(47) 賊盗律29佞像条。延慶二年（一三〇九）四月十一日明法博士坂上明澄章文連署勘文案（『鎌倉遺文』二三六六号）にも所引。

「説者云」は『律集解』か。

(48) 延喜神名式上2宮中条。

(49) 賊盗律29佞像条。

(50) 『先代旧事本紀』卷第二・神祇本紀。

(51) 『旧唐書』卷二十九・李淳風伝に「虞書」の引用を含めて同内容の記事あり。

(52) 『尚書』卷第三・舜典第二を参照したものか。

(53) 『日本後紀』延暦二十三年八月壬子（十日）条に該当記事あり。

(54) 『天地瑞祥志』卷十七・鏡（高柯立編『稀見唐代天文史料三種』下、国家図書館出版社、二〇一一年、三三三頁）。

(55) 『歷代殘闕日記』所収「左大史小槻季繼記」安元二年（一二二八）正月十一日条に、本勘文の「天徳四年く如元鑄之」の部分が引用されている。

(56) 『五行大義』卷五・論諸神に対応する記事あり。

(57) 『春記』長久元年（一〇四〇）九月二十八・二十九日条。